

八 辰 會 雜 誌

第四拾號

明治三十六年四月十七日發行

(非賣品)

北辰會雜誌第四十號目次

論 説

志は遠大ならんことを欲す
諸惡莫作、諸善普行
修養的團體の内容を論す

雜錄

但無信田相爾者豐

修辭異說
宮中御修法の記
戶紫

鳩白老兵雨燈送林櫻窓游清國序
春峯(紀行)記
月一下香霞映タ輪挿を贈るにそへて

八香周波則
村水六鷗野斗田鴨
上函峰人花夢水牛雲南吉

乙女に與ふ入軍來將淺夜
和歌韻道集
冬○春○の俳集
春○の詠集
新寮報
新年大茶話會記事

葛露東將
水征琴斗秋栗ま、本瀬
外征紫露將
水軍川牛水平か、衣軍雲圍

春來れり。演説部大會。文科三年級の活動。剣道部報。柔道部報。漫語。野人語。冷語。前號劍歌壇短評。

北辰會雜誌第四十號

論 説

志は遠大ならんことを欲す

明治三十八年三月四日時習察
小茶話會に於ての演述扣

但

豐

人の成敗利鈍の分かる所、其の原因一にして足らずと雖も、要するに、其の志を立つることの遠大なると、近小なると本づくもの多きに居るが如し。

熟ら人の一生の事を考ふるに、甚だ面白きものの様にもあり、亦甚だつまらぬものの様にもあり、考ふれば考ふる程、何だか譯の分からぬ様な心地のするものなり、今、思を宇宙の間に走らせ、廣大無邊の考を以て人間を視るときは、人と云ふものは、單に地球上の一小動物にして、而かも、其の一生は、宇宙無限の時間の中に、僅かに五六十年、長くも百年位の壽命を保つに過ぎず、全体、何の爲めに生れて、何の爲めに死するものなる乎をも知らず、只寝て食ふて、此の短き一生を送るのみにして、寢につまらぬ、墓なきものの様に思はるなり、然れども、既に此の世に生れ出でたる以上は、天賦の性質を發揮し、身を立て、家を興し、社會を造り、國を建て、内は父母妻子を安養保護し、外は社會國家の利福を増進すること、天の命する所にして、人の性と謂ふ

べく、又人の道と謂ふべきなれ、

さて、天が人に賦與する所の性質を云ふものは、實に靈妙不思議のものにして、之を磨けば磨くほど、光輝を發ち、天地萬物の理を推究し、以て自然力を人事に應用し得るものなるが故に、人たる者は、各、其の性質に適應する所の教育を受け、十分に之を發揮せしめ、又學藝に長し、之を實地に應用し、以て人生の安寧幸福を計らざるべからず、是れ即ち天職なり、今、少年子弟が學校教育を受け、日夜孜々として勉強しつつあるも、畢竟するに、此の天職を盡くさんが爲めなり、即ち、各、其の天賦の性質を開發し、又、各自に適應する所の學藝を修め、以て人生の目的を達せんが爲めに其の道中を歩みつゝあるなり、而して、衆人齊しく志を立て、同じく道中を歩みつゝありながら、其の目的地に到達せざる者の多きは何故ぞや、畢竟するに、蓋し其の志の近小薄弱なるに由らずんばあらざるなり、

時の古今を問はず、國の内外を論せず、世に、聖人賢者と稱せらるる人、英雄豪傑と呼ばるる人、大人君子と持囃さるる人を視るべし、一人として、其の志の雄大非凡ならざるはなし、今、一二の例を掲げて参考に便せん、佐久間象山先生の詩に云、謗者任汝謗、贊者任汝贊、天公本知我、不覓他人知、又云、雨風月如晦、頑犬吠成群、是亦尋常事、利害何足言、横井小楠先生の詩に云、帝生萬物靈、使之亮天功、所以志趣大、神飛六合中、又云、道既無形躰、心何有拘泥、達人能明了、渾順天地勢、と、何ぞ其の抱負の遠大にして、其の識見の卓抜なるや、聞く者、毅然として發憤興起せざるは無かるべし、そこで、又、人事の常として、百を志して百に達せず、六七十にして止まり、十を欲して十を得ず、五六にして止まるは、上の上なるものなり、初めより、六十を志し、五六を願ふ者の中途にして失敗するは、當然の事を謂ふべきのみ、故に、志は極めて大ならんことを欲するなり、而して徒らに志を大にすることは易くして、確然之を立つることは甚だ難きものなり、

古より、立志の工夫を旋らし、之れが說を立てたる人少なしとせず、摩嶋弘氏の立志說に云、人之志也、車之轄也、戶之樞也、人其無志乎、而立之甚難矣、蓋不立之以勇、則因循苟且、有半途中廢之失、不立之以專、則流蕩消耗、有一暴十寒之累、故勇之與專、立志之本也、既勇且專、則天下何事不成哉、」凡古人之所爲、或修身傳道、亘乎萬古而不朽、或高坐廟堂、撐拄乾坤、其學問功業皆發軾乎此、」(中畧)然人心之危、出入無時、動靜不定、其持志也、亦猶悍馬、一緩卽逸、往々不能自制焉、蓋嘗觀輕躁之士、其始立也、疾風迅雨不能及之、銳兵精甲不能禦之、必將一進不退百變不磨也、及其久也、名輕利鑽勦之於內、蛾眉靡音蕩之於外、或窮困枯之、或喜怒擾之、紛紜繆輶、日喪月失、少而勇者、老而爲怯、少而廉者、老而爲貪、時少省之、何益之有、故曰、立之以勇、勇則能守、守則不變、立之以專、專則不分、不分則精、是以惰氣將生、則勇以挫之、慾心將崩、則勇以鎮之、猶將之御士卒、主之令童僕也、將嚴主明、則雖悍卒黠僕、久而自伏矣、」外物之誘、專則不應、患難之來、專則不動、猶松柏挺立、肅霜積雪不能虧之也、然後身可榮辱也、志不可榮辱矣、身可生死也、志不可生死矣、所謂立其大者、小者不能奪、此之謂也、と、此の說や、立志の要を說て盡くせりと謂ふべし、吾人後進の者、宜く常に此等の說を心に記し、確く志を立

て、以て自暴自棄に陥らざらんことを期せざるべからざるなり、

序でに、大言壯語と云ふ事に就て一言せん、學生の中には、廣大なる理想を有して其の言を壯大にする者あり、世の中には、此等の人をして、一概に空想家なり、徒らに其の言を壯大にするのみにして、實地に當ては、何等の用を爲すものに非ずと云て、之を擯斥する者ありと雖も、是れ蓋し理想家と空想家とを混同せるより生じたる誤りなるべし、元來人間の事は、理想より事實を生ずるものにして、此の理想家の在ればこそ文明も進歩するなれ、若しも此の理想家を不用なりとすれば、學者も不用と爲り、識者も無用と爲るべし、學者も識者も存在せざれば、世の中は眞の闇と爲り、文明開化は到底望むべきに非ざるなり、今日の、我が國の文明進歩は、實に維新前後に於ける理想家の賜と謂ふべきなり、吾人も、亦務めて大なる理想を懷て、人文の先導者と爲り以て福祉を後昆に貽さんことを期せざるべからず、

諸君に於ても、須く常に大なる理想を懷くべし、決して事物の現状に安すべきにあらず、宜く大言壯語すべし、決して蝸牛殻中に跼蹐すべきにあらず、大なる理想や、大言や壯語や、亦其の志を雄偉ならしむる所以なり、唯、常に大に戒慎努力すべきは、志を立つること 確乎不拔にして、其の理想を現實にし其の大言壯語を躬行する上に在り、徒らに思ひ、空しく語るは、是れ眞個の虛言家なり、要は、諸君、宜く理想家にして實踐家と爲り、大言壯語者にして躬行者たらんことを勉むべきに在るなり、果して能く斯の如くなれば、庶幾くは各、其の志を達するを得ん乎、

諸惡莫作、諸善普行

無 信 仰 者

と釋迦が叫だのは今より三千年前の事、而かも眞理は永劫に眞理たるを失はないので、惡魔の風が吹き荒み、世に罪惡の絶へない間は飽く迄動かざる玉山なのである。

釋迦が肉と靈から出來てゐる人間——暫らく森内教授の言をかる——に安心立命を得させ様と、幾年の間菩提樹の下で考へ出したのが、佛教である。其第一の福音は例の四句の、諸行無情云々と云ふ、頗る涙っぽい、悲觀的なものであつたのである、即ち吾人は死せざるべからずてふ事なのである、然れども吾人は常に思ふ、恐るべき死よ、嗚呼死よ！吾人は遂に死せざるべからず、云々何が故に死は恐るべきか？釋迦も亦而かく考へたのである、茲に於て彼思へらく人間は肉と靈なり、肉は死すとも靈は決して死するとなし、と而して更方に彼は第二の福音を叫べり、曰

く

諸 惡 莫 作 諸 善 普 行

彼れ主張すらく、生前に人若し此二句を實行せば、靈は正に極樂に行くを得べし。此二ツの福音を根底として、彼れは遂に佛教と云ふ面白さ——さなり余は面白さと云ふ——宗教を編出した、其結果彼は弊衣破帽あらゆる艱難と、勞苦をなめて遊説して歩むのである。

當時彼れは一の家屋も有せなかつた、一の食も辛ふじて之を托鉢して得たと傳へられてゐる、

幸にして彼の堅忍不拔は衆人の諒する所となつて、教は漸次に其翼を延ばすを得たのである、延びては延び、遂に我欽明帝の何年と云ふに遠い印度の生産物が、同時に附隨せる迷信と云ふ尤も嫌ふべきものと共に輸入せらるゝに至つた。

此の如くにして輸入せられたる佛教はどんな効果を與へたゞらふか、四天王寺の建築となり、法隆寺の起工となり、日々月々に盛大を極める様になつたのである、従つて迷信又迷信、空海、最澄の徒出で、遂に神佛混交を唱へ出すに至つた、何なる謬見だらう、此外吾人が有せる迷信の凡ては何か起つてゐるか、悉く佛教からである、吾れ會つて三世相と云へるト巻の一書を讀む、内容殆ど日の善惡、旅立日の如何、等一笑にも價せざる事項のみ、此等の事實は皆其起因は佛教にあるので、翻つて之を何が故にしかく、佛教の流布に意を盡したるかを思へ、唯々衆生濟度と稱する奇麗な名の下に存してたつたのは明である、之を以て上は天皇より下一片の漁民に至る迄皆佛教を信じて未來に於ける慰安を求めたので、若し此の教が此の如く純然たる宗教として、今に至る迄變らなかつたならば、どんなに奇麗なものだらう——假令迷信は混りてゐたとしても君には忠、親には孝、よく其分限を重じて越ゆるべからず、十善を保ち五戒を重じ、諸善普く行ふべし、諸惡決して作すべからずてふ、誠に喜ぶべきものであつた。従つて僧侶も亦今日の如く墮落はしてゐなかつた様である、下つて後白河帝の時代に於ては、佛教の盛大なことは吾人の想像以外にあつたので、各寺兵を貯へて掠奪、強請を事とし、其横行暴戾は遂に帝の歎する所となつた位である、而かも鎌倉時代に於ては戰場の悲觀的思想は佛教のそれと一致して、皆佛門に

入つては禪を學び、天皇も亦自ら法皇と稱してたられたのである、信長の時代に至つて彼頗る暴僧の專横を憤り、三井寺を燼き、耶蘇教の輸入を許し、佛徒の漫暴を抑へんとし、遂に南蠻寺を起すに至つたが、徳川時代に至り、該教の禁止を命ぜしより同時に南蠻寺も破壊の悲運に陥つたのは止むを得ざる次第である。

茲に於てか、一時中絶の姿であつた佛教は、又もや一道の燭光を得て再び其勢力を恢復し、人民皆彌陀の光明に浴するを得た、此の如くにして二千年間、多くの血と屍とを犠牲にしたにも拘らず、一の大打撃も蒙ることなくして、増々盛になるを得た間に日本は幾何の利益を得ただらうか、幾何の損害を蒙つたらうか、比較して見るに利益てふ点は誠に寥々たるものであるまいか。されば既往の事實は暫く之を讀者に譲り、更に翻つて現今に於ける狀態に觀れば、どんな感がするだろう、云ふ迄もない本願寺僧侶の墮落、禪宗僧侶の腐敗、實際驚き以上の事なのである、ありもしない様な御託宣の嘘八百を迷信せしめて、老婆の臍縄や、水呑百姓の汗みどろになつて儲出した金は、皆此等墮落僧侶が酒食の用に供せられて、苦しい恩をした老婆や、水呑百姓は、特に候事てふ一片の受領證を、一番極樂への近道と思つて、鬼の首でも取つた様に喜んでる圖に乗つて、軍國多事兵馬慄惲の時に、相續講員の一戸から一圓宛出さしめて、借財を抜かふなんて、其圖々しさ加減、云はゞ無智文盲の百姓どもを欺くのと何の差異があるだらう、勿論欺かる者も悪いには違はあるまい、がこんなとを云ふと、或人は佛教の傳導には方便が必要であるから、少しあは迷信もやらせなきやならむて云ふ人もあるだらうが、考へて見玉へ、不妄語と云ふと

を教へる爲めに、既に妄語しながらでもよいだらうか、不邪淫と云ふとを戒むる爲めに、既に邪淫をなしつゝでもよいだらうか、三千年前の釋迦は決してこんなとを教へたのでない、衆生を濟度して安心立命を得させようと思つたのである、酒池肉林の間に奔命し、美女に耽れどは云はなかつた、莫大の財をあれとは云はなかつた、嘘八百の迷信をさせて、無智文盲の百姓から金を集めよとは教へなかつた、此様な僧侶がなんでまあ十善五戒なんて言葉を、口から出せよう、身に金襴の法衣を付け、手に珠數を爪繰つてたつても、何でまあ佛教が傳導され、衆生が濟度されよう、諸行無常の鐘の音は、絶へず響てゐるけれど、祇園精舎の檐は未だ朽ちないけれども、葷酒の香や魚肉の香が鼻を打つと言ふ、懺悔の願の聞へない間は、佛教は飽く迄闇黒の裡に包まれてゐるのである。吾人はどうしてまあこんな僧侶に導かれて未來を樂しむ事が出来よう、此様な僧侶を仕はしてたくに何でまああの高い殿堂樓閣が必要であろう、こんな僧侶——鸚鵡だつて教へさへすればどんなとでも云ふ——の福音が何で有難い、佛教の傳導に女は不要な筈である、酒もいらない筈である、こんな人によつて傳導される佛教が何で日本に必要だ、必要のない佛教に金を與へる所以はない、日本の穀漬しの様な僧侶なんかは、一人も日本に居てはならぬ、有害無益な害虫は驅除して放逐しなきやならむ、毎年毎年寺院の建立、鑄鐘、ふき替、修繕、等に寄附せらるゝ此等の寄附の總計は何千萬に昇るだらう、日本全國一ヶ年に無益なる寺院の爲めに投する金錢の總計は、慥かに軍艦の二三隻に價するだろふと思ふ、なにもこんな腐敗した、僧侶の引導は受けなくつても、未來を教へて頂かなくつても、善行をすればいゝ報が來る、悪い事をす

れば悪い報が來る位の事は知れきつてゐるではないか。

昔は國民教育の大半は僧侶に委ねられてゐたので、隨分村の和尚さんでなければ分らなかつたともあつたろう、庄屋の相談にも其一員として必要があつたろう、が然し今はこんなものは少しも必要がない、教育には學校がある、村には村會議員もある、此んな墮落坊主が何の必要があつう、前世紀の遺物今世紀に必要はない。

今更めて云ふではないが、凡てものは開拓が必要である、開拓者が惡るければどんな立派な基があつても、其結果は惡に終るは確である、釋迦の福音は如何に尊くても、開拓者が惡ければ生産物の惡い事は判りきつた話なので、惡い開拓者は排斥して、其根本を保護するのは現下の急務であるまいが、嗚呼佛教の開拓者は出ないだらうか、東洋のルーテルは何時現はれるだらうか、君人は唯諸善を普行せむのみ、諸惡を之れ作さざるに力むるもの。

修養的團體の内容を論ず

堀田相爾

(一) 修養的團體とは何ぞ——精神的の誤解——默座的宗教——眞の教會——大本と
鎖末——アーヴィング——東嶺和尚

其宗教に關する其道德に關するとを問はず苟くも多人數相倚りて共に進まんと欲するものは修

養的團體也。故に家庭の如きは家族相互に修養せんとするを以て修養的團體の一部となすべきもの也。子曰「有朋自遠方來不亦樂乎」と修養的團體を云へる也。昔聖靈の著しき降臨ありたるやンテコステの時に完成せる教會も亦修養的團體也。「歸然一閣倚林垌。中有神龍臥不驚。六月青天無點雨。幾人來此看雲生と此幾人雲湧を見て天地の雄大を觀じ道を論じて幽玄に入るとときは修養的團體也。若し夫れ袁氏が別業に『主人不相識。偶坐爲林泉。莫謾愁枯酒。囊中自有錢。』とあるの清談も亦是れ也。

世に道を傳へ業を樹てんとするもの、或は校を興し塾を開き又衆を會し衆に交はり、以て其道を傳へんと欲す。然れども大概外形的の企圖を以て鎖々たる小事となして之を輕んじ自ら精神的或は靈的と稱して傲にして慢教授訓育の方法企圖を畫策することなし。

基督教徒の然る者曰く、只神を信せよ。神の言は道理を告知し良心を警醒し悔改め信仰に導く者也。律法は救濟の必要を示し、福音は救世主を啓示する也、律法は實に倫理學の要領を抜擢したる陳說に非ずして一言一語悉く道徳的の感能に直話するもの也。キリストの愛と憐みとは只此の律法の中に包含せらるゝ也。而して基督は今に至る迄生きて此世に働き給へりと信じ只これによりてのみ生きん、と。其信仰誠に堅し。然れども彼等は時に現世の種々の問題に遭遇するに當りて、其所分を悉くキリストに歸し、自らは拱手して曰く補助によりて業成らんと彼等の道を傳へ德を樹てんとすること往々其細末に重きをなかず所謂大本は神の愛也と稱して無爲默座す宜なる哉彼等の功業舉らざるや。

嗚呼吾人はイエスの訓戒と先例とに依りて其品行を形造し精神は神の言によりてのみ養はれて益強く聖靈は常に其内部の生命を供給す。キリストは即ち永く世の民と共に在り。

然り而して其信者たるものは主の恵の裡に生長し且已れの言行によりて主を他人に教ふべき也、教會は其實在することによりて必ずキリストを宣べ傳へざるを得ず其救主に關して緘默を保つ事能はず又光を蔭蔽する事能はざる也。

實に死せる教會はキリストを教ふるの止みたるもの也。眞の教會即ち其中にキリストの生命を存するものは必ず神の工^{ワザ}を成さるを得ざる也。神の工をなさんとせば何ぞ默々として止む可んや宜しく吾人の腦漿を絶りて傳導教戒の企畫を講せざる可らず其方の微にして其法の細なる大本と相應じて等しく神の喜び給ふ所ならん乎。

故に修養的團體は其大本綱領を定めて而して後其企畫は細微に亘り毫末を察せざる可らず。即ち試に修養團體の一部なる家庭に就て其一例を見よ。

人の家庭に於ける感化の大なる例はワシントンアーヴィングに於て之を見る。彼はニューヨークの商家に生れ幼よりして其家業の援助たるを目的として法律を習へり後彼の体質の纖細なるを以て終に文筆を以て業とするに至りしと雖も彼の商家に生れ又法律的教育を受けたる事實は實は彼をして偉大なる勢力と規則正しき習慣を得しめて文學者に稀なる着實なる生涯を送らしめたる。見よ始め彼のが其處女作『ジョナサン・オールドスダンスの手紙』を出してより、佳什續出し彼の兄が事業に失敗して遂に彼をして生計の目的の爲めに彼のベンを動かすべきを命じたるこ

きも、彼は他の文士の如く之を厭ふことなく喜んでパンの爲めにパンをとれり蓋し其後に出でしものスケッチブックと云ひコロンバスの傳、ワシントンの傳、と云ひ名作頻々止む時なし彼は實にかれのベンを活潑に働かしめたるもの也たゞへ此事を以て彼の長所となして之を賛するもの、或は俗的なりとして排するものも、等しく之を以て彼の商業的教育がかれの文章をしてかくの如く活力あらしめたる事に一致すべき也。

而して此事たる獨り家庭のみならず他の修養的團體に於ても其内容の如何によりて會員の思想を變じ行動を化せしむる事決して難しこせず。易に曰く霜を踏んで堅氷到ると。集會に於ての小活動は會員各自の品性上に偉大なる感化を與ふべき也。

余は假りに修養的團體の事業を分ちて演述、講書、文章及科學、企業の四個と爲さんと欲す。東嶺和尚曰く近時多衆の間熱、寺門繁興を佛法の大幸と爲るか如きは大に笑ふへしと、修養的團體若し大本を忘れて只其企畫を重んせば眞に笑ふべし。

(一) 演述——ロンドンのレバイバル——演説の効用——演説の練習を怠たるの二因

學問の二種——石塊と南瓜——余の友

現時ロンドンのレバイバルを見ずや。一ウエーラスの鑛夫がウエーラス語を以て説教し、英國紳士之を聽くもの滿泣して即座に悔改む。と。修養的團體に於て、互に時を期し人を定めて演舌し、討論するとき辯士卓を叩きて樓上晝靜か也。時に窓より眺むれば山色遠く蒼々此時に當りて誰れか肅然として省察せざらんや。實に同志相集りて演舌し討論するは修養團體の最急務にして其品

性修養に益する、又辨舌練習に資する想ふに些少に非る也。

昔者デモセニス吃にして道説す。人これに耳を貸すものなし。彼即ち奮を發して海に至り怒濤に對して辨舌を修練したりと。彼の雄辯故ありと云ふべし。實に古今を論せず東西を問はず辯に達せんとするの士は其苦心慘憺驚くに堪へたるものあり。或は名士の草稿を暗誦し或は鏡前に立つて己が姿勢を匡し或は野に立つて木石を對手とする等其修練甚だしきものあり。宜なる哉彼等一度壇に登つて滔々數千言、聽者倦まず。自ら勞れず。猶餘裕ありて會衆拍案す矣。然り而して今や辯論を以て世に立たんとするものにして、なほ亦此修練を怠らんとす可怖也。然り而して其怠たるは何の故ぞ余以爲く二因ある也。(一) 卽ち之を修練せんと欲するも其材料に苦しみ終に之を怠るに至る也其材に苦しむは何故ぞや自己の説を立てんとすれば也。故に己れの見識立たざることには決して演舌することなし。勿論己れの見識を立つる事甚だ稱すべしと雖もこれが爲めに演舌を止むるに至りては吾人大に惜まざるを得ず。

學に二あり。一を説明的學問とし、他を規範的學問とす。説明的學問は吾人の價値的選擇をすて事實を客觀的に研究する學問也。物理化學心理學等これに屬す。又他の規範的學問は吾人の主觀的要求より客觀的事實を判断する也。論理學美學倫理學等之れに屬す。

吾人一定の見識を立て、論する事及び然らずして雜事を漫然として演説するとの別は勿論規範的學問と説明的學問との區別と相隔る事遠しと雖も吾人の演舌の材料は一般に説明的學問を避けて規範的學問(殊に倫理道德に關して)を論究するを好みが如し。これ實に規範的學問は己れの見識

を立つるに甚便なるによるならん。
されど此法は便なるが如くにして實は便にあらず。説明的學問こそ眞に材料多きものなれ物理學書の一章博物學書の一節實に趣味多き材料を捕へうる也。一科に含まるゝ章節極めて多くこれをのみ講するも盡くるの期なし。吾人何をか苦しみて深くも研究せざる規範的學問を講ずるを要せんや。(二)演説練習を怠たる第二の因は彼等餘りに世を恐れ、人を畏れ、獨立獨行自れの思ふ所を行はんとするの勇なき也。演説の秘訣なりと稱して人の云ふ所をきくに其演壇に立つや聽衆を以て石塊又は南瓜と同視し、以て己れの思ふ所を演すべし、と、己に聽衆を以て南瓜となさば、己れの云ふ所・正なるも邪なるも理なるも否なるも奸なるも惡なるも彼等の知る所に非ざる也、况んや己れの云はんとする所は邪に非ず非にあらず奸に非ず惡に非ず己れ之を正なりと信じ只巧乎拙乎の問題に止まる。拙は修練によりて巧ならしむべし。修練せざれば常に拙也。而して今聽衆の前に立ちて拙談を試むるは實に修練の途なるを知らば宜敷拙談を試むべし。己に拙を以て宜しこせば其材料滾々として盡くる所ある可らず余が友某氏機會ある毎に演説を試む。假令へ蒼忙にして豫備するの暇なきときと雖も彼直に題をつくり時には卓上の花を見て嘗て己れが探梅せし事ありしを想起して之を談じ、或時は當日の飯菜より聯想して衛生の要を論する等其題つくる事なしかくの如くにして始めて演舌に達するを得べし。始めより自れの威儀を裝ひ人の批評を恐るが如くんば到底發達の見込なき也。

(三)徂徠——精讀——ソクラテス——講書の材料——清澤先生

鷗鷺夜蛩を撮りて毫末を察し畫出でゝは目を瞑して邱山を見ず。性を殊にするを言へる也實に然りされど世人往々此言によりてこれに安んじ己れの能くせざるもの學生に殊に多し。然り單に學術のみならず倫理修身の教訓を知ること少なきものの如き又社會の事情に暗きが如き皆これ其性を殊にせる乎否乎。

余をして云はしめよ。然らず。其修養をなす事不足なるが故也。其修練をなす事散漫なれば也。東坡は孟子を愛して常に之を精讀す徂徠は論語一卷のみをよみて他を顧りみざりき。然り而して古今幾多無數の學者各々千百万卷を讀破し、研究論議喧々たるを見る。然り彼等は只表面のみを研究す。朝に乾巻を論讀し夕に乾巻を讀過す。泛々として腦裡沸湯の如く茫漠として知ることなし。

獨り東坡徂徠に至りては其論孟を取て攻究冥思眞に神に通じ他を顧ることなし永久の不朽故ありと云ふべし。

ソクラテスは書を講することなく専ら辯論を以て人を教へ導きぬ。曰く書物には物を問ふこと能はず、又これより答を得ることも叶はず、此故に書物は決して人を教ゆるの能力なし。我等は前より知る所のものを書物より聞くに止まる。

現時の青年を見よ其講學するに當りてや。一にこれ書によるに非るはなし彼等一書を讀みて之を

解しうれば去て他書に移る。佛者の所謂「今時の學者縦に叢林に入り来て自ら衲子と稱し、他の作處に隨て漸く道心を發して未だ出家の本志を知らず。菩薩の行願を究めず古人の行履を窺ふ。」と云へるもの學んで精しからず途路の嶮難に當りて弊廢するの徒也。修養團體に於て或は書を輪講し、又は講讀し、又は廻讀し、而して研究せんとするは宜しく注意して不精を避くべき也。

清澤先生は最談話を好み話柄盡くるなし。然れども時に話の材料盡くる事ありて、主客默して對座し、只時計の針の音のみ。此に於て「先生は靜かに右手を伸ばし、机上の書を披き、先づ讀む事二三行客に面して曰く茲にこんな話しがありますと、談すること數分、また書を讀むこと五六行再び客に面して曰く、茲にこんな話しが書てありますと此の如くにして讀では談じ談じては讀み話柄盡くることなし」と。

修養的團體の集會にて雜談のみに耽る暇あらば各自互に愛讀書を持寄り先生に倣つて互に其書に就て談すべし黃口乳臭の論議を避くるを得ん乎。

(四) 文章及科學——孫子の精細——活潑に筆を動かす——シェレー——科學——シリル——神秘的、

孫子の研究は精なる哉。想ふに彼の十三篇は彼が冥想し實驗し讀書し經驗し而して冥想して更に熟思し攻究したるの結果ならん。實に始計の篇に於て五事を論じ或は作戰に於て拙速を尙ぶを説く等、言々句々後世用兵家の規範たらざるはなし。想ふに若し彼をして深く研究する所なく、漫然として説かしめば何ぞ後世の稱賛かくの如くならんや。精神の効も亦大なりと云ふべし。修

養的團體に於て若し雑誌等を發行せば宜敷一同精研の結果を發表すべし然らざれば團體滅亡の途也。

されども文を作るに際しては活潑に筆を動かし、如何なる材料をも即座に捕ふるの心掛なかる可らず。シェレーはイートン學校及オックスフォード大學に在りて、常に詩文を草せしが彼はスコットランドを去りてアイルランドに至るや。直に“Addressee to the Irish People”を草せり。

彼は實に怠たらざる也。常人の少しく詩才あるものはかくの如きときには直にアイルランドの風光に接して、蕩々遊行し、凡俗なるものはダブリンの市に物價を問求する位が關の山ならん。シェレーは即ち然らず。直に勉強して此書を出だす。健筆故ありと云ふべし。シリルは大詩人也。大文豪也。人皆之を知りて之を頌し、亦之を誦す。然れども知れ。彼は又詩人たり文人たりと共に大哲學者又大科學者なりし事を。或人獨逸の植物學者に云て曰くシリルの詩、余の愛誦して措かざる所也。植物學者笑て曰く、彼れ何ぞ詩文を知らん。シリルは實に我植物學界の泰斗也。若し夫れ詩文を能くするものあらばそはフリードリッヒ・フォン・シリルにあらざらん。と、獨り植物學者のみならず。其他の科學者に問ふも亦かくの如かりし、と、嗚呼シリルの大文學、大詞藻、は實に精細なる科學的研鑽の生みし所なり。

然れども新學術は常識的也。舊學術は神秘的也。經濟學、社會學の如き新科學は殆んど全部常識を以て組立てられたる如く感ずるに反し神學、古哲學の如きは殆んど全部冥想と直覺とによりて組織されしを見る。蓋し新學術は之を樹てしより日未だ淺くして充分研究するの暇を得ず。舊學

術は充分之を研究するの時間ありたれば也。支那印度の如き長き歴史を保つ邦土はたゞへ衰へたりと雖も一種云ふ可らざる趣味幽玄の氣あり。之を是れ新興にして歴史少なき米、露の如きに比すれば後者の蕪雜にして無趣味なるは、實に前者の秘密幽玄なる趣味と何れか美なる。故に吾人の研究は科學的なると同時に神秘幽玄的に非れば進まんとする欲して退くが如し注意すべき也。

(五) 諸企畫——詰込主義——獨立的精神——創造的精神——余の書齋

青年を導き又兒童を訓へんとするものは名を正しくし、立つべきを立て廢すべきを廢し敬すべきを敬せしめ禮すべきを禮せしむべし。其の訓育に要する學問、其性に合せる藝術等、宜敷督者之意に應じて習得へしむべし。然りと雖も其壓制的にして詰込的なるを哀しむ也。

青年又兒童をして例へば音樂を習はしめんとせんか。いかに音樂の要を説きこれをして樂器の前に立たしめ、厭ふものを強いんとするも決して聽從するものにあらず。必ずや其以前或は音樂會或は寄席等に隨伴せしめて自ら音樂を習はんと發心せしむる事を要す。即ち兒童をして創造的獨立的精神を養はしむべし。

兒童をして創造的神精神を養はしむるの法如何實に現時青年兒童の創造的神精神なきや。彼等は學ぶには人の作れる時間表により修めては人の言ひたる格言をのみ信す。自ら發明し自ら按出するな

き也。宜なる哉長して一國を治め一家を司るときに彼等爲すなきや。單に先輩の説、他人の議を容るゝのみ。一朝事あらば昏迷し、平日事なければ濛乎として眠る。浮雲と雖もかくの如く泛々

たるなし。嗚呼其因遠く兒童の時、彼等の父兄が彼等に獨立獨行の神精神を修めしめず、又一層進んで創造的器量を與へざりしに因る。

兒童をして創造的神精神を養はしむるの法は徒らに口舌を以て之を訓戒すべからず下記二三の例に準じて其方法を講ずべし。(一) 理化標本を探集調製せしむる事。此事何故に創造的神精神を與ふるやと云ふにこれ自ら樂しみて自ら爲すが故也。始め一度父兄たるものこれに模範を示さば後は自ら進んで之を行ひ、兒童に多くの科學的智識を與へ、自ら工夫して自ら樂しむ活氣ある神精神を養ふべし。

余の實驗する所によれば近時の父兄は頗る兒童の標本製作的事業を爲すを嫌ふが如し。嘗て一少年あり。少年雑誌に於て、陶器製造法ありしに倣ひ即ち庭前の坭土を掘り水を加へて之を溶き、之を茶碗形につくりて火鉢に入れて窯業を倣はんとす。父兄憤然、坭器を出して、地に抛ちて粉碎せしむ。兒童潛然として泣き、工夫的精神茲に萎む。(二) 幻燈命令法。兒童教育の根元は幻燈に在り。兒童に命令すること、又は忠告する事は口舌を以てすべからず。兒童に對して種々の有益なる事業例へば前述の理科標本をつくるべしとか、其他日記を記すべし、とか父母の命を奉すべし、とか、時間中に談話すべからず、とか、云ふ事は皆幻燈にて命令せざる可らず。幻燈によりて日記を記すの面白き事を映し出し説明者亦上手ならば單純なる兒童をして深く感せしめ即夜より日記をつけしむるを得べし。

嗚呼口舌の命令は只兒童をして依頼するの念を發せしむるのみ幻燈の命令は兒童をして禁ず可らず。

ざる快樂の裡に創造的精神を發せしむ。

修養的團體にては其會員を感化するに幻燈を以てすべからずと雖もなほ其設備等に太甚だ注意すべし。周圍の物品は使用者をして偉大なる感化をうけしむ。

余の欲する書齋は紫檀の床間あるに非ず備後の表しけるに非ず軸を要せず骨董は邪魔也。

只世界地圖日本本地圖其他理化博物の掛圖を以て壁間を充し卓上には和漢洋の書籍堆く立つて窓を開けば皎々として秋夜月清かれ。

習慣的怠惰 時間 節儉 雜談 大本と細末 基督

修養的團體は前述の設備的內容あると同時に亦下述の如き精神的內容なかる可らず其著しきもの習慣的怠惰とす（一）會全體としては（イ）開會時間の遅き事にして、集會をして失敗せしむるの因は實にこれ也。基督教徒の集會のみは此非難を免るべし其他の人々はこれに慣れて之を通常となし少しも怪しむなし。其時を失ひ活動を妨たぐる事果して如何。（ロ）節儉ならざる事。人は個人としては節儉にして厘毛をも惜用する事あれども、團體の費に至りては之を頗る贅用するもの也。負債にて苦しみ其前後策に於て、鳩議せる集會が西洋料理にて放歌飲酒し快をつくして散するあるの今日なれば何ぞ役所の用紙を濫に使ふ小吏あるを怪しまん。（ハ）集會は時を経るに従ひ漸次墮落するの傾向あるもの也。某小主計（現に主計正）ありき新に氏の赴任せる所にては大小主計等日を期して相會し軍法を研究するの金ありしが始めは一同集めて眞面目に軍法を研究し或は論じ或は駁し眞に討究の目的を達せり。然るに何時の頃よりか漸次變性し軍法の研究は姿を隠し、

始めより酒を飲み、妓を聘して、放蕩するに至りしと云ふ。小主計の來りしは正に此時期なりき。幾何日を経て、氏は集會の當番に撰はれぬ、自れの家に他主計官を招き以て會を催さる可らず。而して氏は基督教徒なりき。

當日に至り大中小主計等踵を次ぎて到る。彼等想ふ、眇たる新參の小主計いかなる名案を以て、吾人に賄びんとはすると。急ち室に入りて見る。可驚卓上和洋の兵書堆く積まれ、器具一として質素ならざるなし。彼等兵書を見て心中快からず。されど座して待つ事小時。暫くにして、少主計即ち會を司りて、兵書の研究を始む。彼等怫然として読み、憤然として論す。待つ事久しうして酒至らず。妓來らず。研了りて茶菓出で、小主計閉會の辭を述ぶ。此剛直の行爲直に上長官に聽へ即ち擢でらる。(二)個人としては(イ)雑談剩言する事。雑談する間に事業は逃れ去る。人の惡口すら、近時は之を常として之を罪惡の中に數ふるものなし。况んや雑談をや。若し雑談を禁せよと云はゞ會は殆んど成立たず。衆黙々たるに至らん。其因實に趣味下劣にして、學に不熱心なるによると雖も、若し雑談を廢するの眞熱心あらば、好談良材隨つて生じ、従つて出で、衆を高くし自ら得る所些少ならざらん。(ロ)遠慮なく活動すべし。若し司會者より演舌など乞はるゝ事あらん乎。現時の習慣として一應は之を謙退し、大にやりたければ二度目に乞はれし時位に之をなし、あまり進まざれば數度乞はれて始めて之をなす。此事たる無意味なる哉。不活潑なる哉。若し夫れ余にして演説を乞はれん乎。快諾一番、卓を叩いて滔々として論せん。かくの如く人々互に進みて思ふ所を述べんか。其會や活潑なる哉。愉快なる哉。

嗚呼然れども修養的團體は活動に紛れて粗大なる可らず。或一種の快活にして頭腦の空虚なる者の如くなる可らず。必ず其根原を宗教に求めざる可らず。黒火洞然黑暗光茫々天地失玄黃山河不在鏡中觀百億須彌空斷腸。道の根元元來智なく亦得なし余の論じ來れる所の内容なるもの根本の宗教なくば智なく得なし。

今や基督は永久吾人の内に働き百物爛として輝き修養の端緒茲に生ずるを觀る也。



雜 錄

修辭異說

八 波 則 吉

そいらの修辭書讀みゆくうち如何とねほしき節毎に試に私見を立てたるもの當れりや否や

其一 直喻の一種

直喻（明喻又は明比ともいふ）は一の事物を顯に他の事物と比較して其の類似点を明示するものなれば多くは「如し」「似たり」「例へば」「恰も」「さながら」等の説明詞を要す。これ遍く人の知るところ也。然れども思へ、その説明詞を要するは直喻の多くは也すべてには非す。修辭書中これを誤解せるもの多し。左に説明詞なき直喻の例を掲げん。

(一) 「花の顔」「月の眉」

「夢の浮世」「露の命」「氷の刃」「針の蓮」等は、天爾乎波「の」文字に「の如き」てふ意義あれば云ふまでもなく直喻なり。「一日三秋之思」「一舉手一投足之勞」「管飽之交」「破竹之勢」「鳥合之衆」「懸河之辯」「浮雲之思」等枚舉に遑あらず。

(二) 「獅子鼻」「猿眼」

「蛾眉」「猿臂」「蟬蛻」「蟻集」等の熟語は、前項の「の」文字即ち「の如き」てふ意の含蓄せられたる

ものなれば無論直喻の一種なり。『火急』『瓦解』『虎賀』『狐疑』『波及』『泥醉』『蠶食』『鷦衣』『鐵面皮』『羊質虎皮』『人面獸心』『雲集霧散』『水炭不相容』甚だ多し。

(三) 「山と動かす」「水と早し」

「花、雪と降る」「疑、水と解く」等は、天爾乎波「と」文字に「の如く」てふ意義あれば同じく直喻の一種なり。

泣く涙雨とふらなむわたり川水まさりなば歸りくるがに(古今)

花と散り玉と見えつゝあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける(新古今)

和歌に其の例甚だ多かり。

(四) 「ぬば玉の一黒」「たくぶすま一白」

「薺薦の一亂れ」「菅の根の一長き」「かしの實の一ひどり」「さあくさの一三つ」等の枕詞も亦直喻の一種なり。枕詞の多くは「の」文字にて終る、而して此の「の」の大半は第一項の「の」と同じく「の如き」てふ意の天爾乎波なり。左に類例を擧げん。

天雲の一たゆたふ 朝日の一笑み繁え 朝霧の一思ひまごひ 朝霜の一置きて 草
垣の一亂れて 粗垣の一よそ 磯貝の一かた 岩橋の一間近き 風の音の一遠き
榜縄の一長き つがの木の一いやつきぐに 鳴る神の一音にのみきく 夏草の一思
ひしなへて 久堅の一そら タづつの一かゆきかくゆき 燃大刀の一と心 大ぬさ
の一ひくてあまた 若草の一つま 大船の一思ひ頼みて 山の井の一淺き 白玉の
よふ

「わが子(等)

「の」文字の略せられたるものは、

玉葛一絶えず つるぎ本刀一身上そふ 真木柱一太き にはだづみ一涙 夏
衣一うすき(等)

「なす」てふ文字の附隨せるものは、

雲居なす一遠き 五月蟻なす一さわぐ うみ亭なす一ながき 鶴なす一いはひとほ
り 玉藻なす一寄る 水鴨なす一一人ならびる 螺なす一ほのか 水母なす一たゞ
よふ

いはゆる「じもの」は、

犬じもの一遙に伏す 馬じもの一立ちて蹠き 鴨じもの一うきね 鹿児じもの一獨り
子 猪じもの一膝折りふせて

等いづれも枕詞にして而も直喻の中に數ふべきもの也。就中「なす」と「じもの」とは「の如く」「に似て」と同意の説明詞とも見るべければ其の直喻たるや明か也。

但し左の如き枕詞は(「の」文字あるものすら)直喻に非ず、譬喻の意毫もなければ也。

蘆が散る一難波 青丹よし一奈良 磯の上一ふる しき島の一太和 みちのくの一
しのぶ 草枕一旅 白妙の一衣 敷妙の一枕 垂乳根の一母 百敷の一太宮
八雲たつ一出雲 百足らず一八十 たきよこる一鎌倉 木傳ふ一磯 玉樽一かく

水溜る一池 千早振一神 飛鳥の一あすか（等）

かく枕詞の大半は直喻の一種なれども、慣用の久しき次第に譬喻の原意を失ひ、遂に今日の如く多くは語調を助くるのみの修飾語とはなれる也。

(五) 「足引の山鳥の尾の

しだり尾の一長々し夜』『湊入りの葦分小舟一障り多み』等の序詞も亦直喻の一種にして「の如く」てふ意の含蓄せられたるなり。

蘆邊より満ち来る潮の一いやすしに君に心を思ひますかな（伊勢物語）
中空に立ち居る雲の一あともなく身のはかなくなりぬべきかな（同上）

等こは専ら和歌に用ゐらる。

但し左の如き序詞は直喻に非ず、そはだゝ語呂を合せたるのみにて譬喻の意毫もなければ也。

あまの薙る藻にすむ虫の一われからと 大淀の濱に生ふてふーみるからに 有馬山ゐな
のさゝ原風ふけば一いでそよ 浅茅生の小野のしの原ーしのぶ みかの原わきて流るゝ
いづみ河ーいつみき（等）

(六) 「良薬は口に苦く

諫言は耳に逆ふ』虎は死して皮を留め人は死して名を残す』等の對句も、兩句同等の重さを有せず其前者が後者の譬喻として用ゐられたる時は、説明詞なき直喻の一種と見做すを得。

籠鳥の雲井を慕ふはその友を思へばなり、丈夫の故郷を去るはその祿をねもへばなり（馬琴、

八犬傳）

新沐者必彈冠、新浴者必振衣、安能以身之察々受物之汝々者乎（屈原、漁夫辭）

(七) 「義は泰山より重く」

「死は鴻毛より軽し」等の比較は、別に比較法と稱する修飾の一法を設けざる限りは（實際設けたるものあるを見ず）、直喻の一種と見做すを得んか。但し直喻は二者の類似点を示す、比較法は其差異をも顯はすものなれども、共に一度二者の——大部分の——類似点を想像せしむるは同一なり。換言すれば「義は泰山の如く重し」との比較を只一步進めたるもの即ち此の種の修飾にあらずや。なほ左の例に就て見るべし。

逝く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり（伊勢物語）

月ふけて土に落ちたる梅が枝の影より細く我が身瘦せたり（萩の家遺稿）

かくや姫を見つけたりけん竹取の翁よりも珍らしき心地するに（源氏、手習）

たまく人に生れける其時の苦しみは生きたる牛の皮を剥ぎせんからたちのその中へ追ひ入るゝよりも堪へ難し（舞の本、和田酒盛）

見よ是等は比較の「よりも」を譬喻の「の如く」と交換するもさしたる影響なきにあらずや。



右の外、引喻法も誇張法も貶撻法も、直喻の一種と云はゞ云ふべきも、夫れ等は特に其の部門の設ければ茲には數へず。

之を要するに直喩法は譬喩法の基礎にして、而もあらゆる修飾法中最も肝要なるもの也。然るに多くの修辭書は、單に「如し」「似たり」等の説明詞の明記したるもののみを直喩とし、至て之を輕視せる傾あれば、試に項を分つてかくは論じたる也。(乞一終)

宮中御修法の記

香周南

古籠より粉本數葉を得て諸兄に紹介す元より才短に學淺く以て満足を與ふることを得ざらんも幸に日本歴史研究の参考に供せられんには深く不肖の喜ぶ所なり

抑も我國大化改新以來唐の文物模擬の代となり遣唐使留學生學問僧の派遣連年絶へず殊に佛教徒は彼地に求法の傍ら文物視察に心を注ぎ率先して彼の文明輸入に力を盡せしかば當時上下の指導となりたり而して其唐制模擬の我國に行はれしは先づ上流よりして下流に及び朝堂よりして市井に及ぼされし形勢なりければ此等の佛教徒をして一たび 皇室の歸向を禱せしめんか教權は一時其手に歸し以て一世を風靡するや難きにあらざりき加るに當時國民の宗教心たる幼稚にして大は國家の事件より小は一身の私事に至るまで盡く祈禱卜筮を以て之を決するの時代にありしを以て所謂宗教の萬能を信奉するの時代の思潮と共に朝野靡然として弘法大師空海の真言密教に歸向するに至れり

是より先き南京の舊都に佛教六宗派（三論、俱舍、成實、法相、戒律、華嚴）あり又桓武帝の朝に新京平安に傳へられし傳教大師最澄の天台宗あり何れも幽玄なる妙理を解き一方に諸法唯心と云へば八不中道と答へ一方に十玄緣起无盡法界と談すれば一方は一念三千一心三觀と語り互に燦然たる光輝を放てるが未だ之を以て前述の如き社會の民心に投じて之を悅服せしむるの功に達することを得ざりき其間に役小角（文武帝の御代の人）越々泰澄（孝謙より光仁帝の御代の人）等の修法の蹟あるもこれ山間隱遁者の間に行はれしのみ然るに今や弘法大師空海は當時支那に於て尤も隆盛なる真言密教を滿載して歸り即事而眞の妙旨により莊嚴なる壇場を飾り精微妙軀の五智如來や忿怒奮迅の不動明王や或は諸天善神を祭り劍を立て護摩を焚き真言を誦し持印を結び一心不亂に嚴重丁寧にして衆庶をして畏懼せしめ悚動せしめ悅服せしむべき行儀を具足し調伏息災、請雨除疫等種々の場合に從ひて特殊の法を修め加持祈禱の秘奥を盡したるに至りては頗る人心に投合し其歡迎を受けしや論を待たず最澄師が桓武天皇の歸依を得られしは彼の非凡なる學徳によりしも其半面は彼の傳へし不完全なる密教なりけり况んや空海師は秘密教の奥旨を極め青龍和尚の玄底を探り來りて壇場の莊嚴に至るまで悉く其精美を盡し自己の大技倅と又大度量は此をして九鼎大呂よりも重からしめしに至りては上は朝家の尊信となり下衆庶の悅服となり一天四海を擧げて真言密教に歸向したるも亦宜なるかな特に鎮護國家増進民福はこれ空海師の開教の臂頭に揚げし大旌旗にして前述の儀を具する修法を以て之に伴はしめしを以て國民をして真言密教に對して安心を與ふるに極めて便利を有せり海師が嵯峨淳和仁明三朝の尊崇を博し彼の法子法孫長く其澤

に潤ふことを得たる亦隅然にあらず今叙せんとする宮中の御修法も此鎮護國家聖躬万歳の祈禱的法儀にあるなり。

仁明天皇の承和元年空海上奏して曰く

空海聞ク如來之說法有三二種、趣一ニハ淺畧ノ趣二秘密ノ趣中略今所奉レ講最勝王經ハ（宮中に年々最勝講ふ經文を講讀す）但讀其文空ク談其義不三曾テ依レ法書像ヲ結壇修行ニ雖モ聞クト演説ニ甘露之美ヲ恐クハ
關レシ管音ノ醜醜之味伏乞自今一依經法七日之間持擇解法之僧二七人沙彌二七人別莊嚴一室陳列諸尊像奠布供具持誦真言等

是によりて詔して曰く

依レ請修レ之永爲恒例（此文は類聚國史にのみあり）

とこれ其起因とす實に正月八日より十四日まで七日間毎年不欠に之を行はれ八日より十四日まで之を後七日御修法と云ふ

正月一日より七日迄は中和院（神嘉殿）に於て神道に屬する式典を行はれ八日より十四日までの御修法なるにより後七日御修法と名く
仁明天皇は空海の奏請を嘉納せられ特に宮城中なる勘解由使廳たりし官舍を以て内道場と定められ之を真言院と號し以て修法の道場となし王朝の盛時は實に莊嚴なる法式を具へて修法せしめられしが中世以降火災頻に至り王權の衰微と共に大内裏造營も延暦の古制の如くならざりしも此修法は宮中毎年の嚴儀として之を廢せられず終には紫宸殿を以て真言院代として之を行はせらるゝ

に至り後花園天皇の時に及べり然るに長祿以來室町幕府の衰微とともに天下大亂を來し人民天子將軍あるを知らず皇室の式微殆んど其極に達し從つて諸典例の廢絶して行はれざるもの多きを以て御佛事の如きも亦之に伴ふこと殆んど二世紀に及べり然るに織田信長豊臣秀吉等交々起りて撥亂に務め徳川家康の江戸幕府開創より天下太平に趣き從て朝廷も稍や舊來の面目を改めらるゝに至り諸典復興の機運を開かんとせしや元和九年東寺の長者（住職）義演（晴良ノ子）は奏請して御修法復興を奏請して又將軍の認可を得て之を行ふこととなりしかば勅して紫宸殿を以て真言院代として其道場に充用し紫宸殿支障ある（即猶穢跡）の時は東寺の灌頂院を以て真言院代として其道場に充用せられて以て明治維新に及べり之を元和の復興と云ふ

然るに朝政維新に及ひてや舊物破壞の極端なる潮流は用捨なく佛教界に及ぼされ明治四年九月朝廷の御佛事都て廢止せらるゝとともに此儀も亦た廢典となれり然るに十年を歷て明治十四年に至り東寺の長者乘禪首として之が再興を計り百方斡旋の後遂に勅許を得て東寺の灌頂院を真言院代として之を修行することとなり翌年十五年以來毎年舊例を追ふて宮内省より天皇御衣を下され地方長官其道場を臨監して之を修行せしめ今日に及べり之を明治の再興と云ふ

御修法の本尊としては金剛界胎藏界兩部の曼荼羅を尊像となし隔年に兩界の壇を飾り其他増益、息災の護摩と又五大尊聖天十二天等の各壇を設け供具を奠布す法式次第は之を略す

中古の制堂内の鋪設は掃部寮の主務にして本尊以下雜具の保管は圖書寮に屬し供物は大膳司之を司る、

要するに此法を修するは是れ國家安穩聖躬万歳を祈願するものなりと知るべし。

御修法中の最大重件は御衣の加持なり天皇は大極殿に於ける讀經の際には御親臨の例式あるも未だ真言院に行幸の例なし元和復興の後には時々出御御拜等の事ありしも是れ亦内儀にして公式にはあらざりき然るによりて御身代として御衣を下して加持し奉るの例あり明治十六年以後は毎年亦古代の如く御衣を下さるゝ事となり即前年十二月宮内省より京都宮内省支廳に回付し一月八日京都府の長官は勅使となりて參向し是を守護して道場に向ひ東寺長者之を拜受して勅使の任務を終り更に知事の資格にて參拜することとなるの例なり一月十四日返上の時も儀又同じ。

王朝の盛時には以御修法に要する諸費用は一切官給のみなりしが元和復興の後は年々廩米二百石を賜はり以て諸用を辨じ來りしが明治再興の後は東寺の支辨にして一切官給を仰がすと云ふ。

御修法中は大阿闍梨（法頭）は弘法大師傳來の袈裟を着用し伴僧は各々階位の制に従ふ。斯の如くにして後七日御修法は今日まで其跡を絶たずして連續せり之を古代の嚴儀に比すれば其一班にだも如かざらんも皇室と佛教との關係は猶ほ是によりて一綫の微脈の絶へざるを見るを得るなり。

夫れ一御佛事の興廢は元より日本佛教の眞價値に於ては増減する處あらずと雖も一千有余年以來國家と皇室と相倚りて政化を翼賛し以て國華を煥發せし佛教の功亦鮮少と謂ふべからざるなり然らば時勢の變遷氣運の轉移する一に舊制を墨守すべからざるは勿論なれども國家の佛教を待つ豈之を度外視して可ならんや。

玆に掲出せしは當例御修法なり此外に國家の大變に際し厄災兵亂又天皇の大漸等に臨時に行はるゝ修法にして太元帥法、熾盛光法、七佛藥師法、普賢延命法等數多あるも之を略す當例の法すら嚴儀を具へて之を修せらる況んや臨時の大法をや此等の内には極めて秘法に屬して傳承するの人すら鮮少なるあり今は一々枚舉せず。（終り）

江戸紫

紫

雲

△江戸自慢として世に云ひならはしたもの。紫染、色摺錦繪、釣鐘の出來合、針金賣、羅宇のすげかひ、縫針賣、印版墨賣、火打鎌石賣、ほうづき賣、火事、馬鹿者、癩病、蝮蛇、齒磨賣、織紋熨斗目、文盲醫師、占卜者、風呂屋の數々なり。（江戸著門集）

△京都。京は砂糖漬のやうな所なり。一体雅ありて味に比せば甘し。然れどもかみしめて、むまみなし。唐びたるやうにて潤澤なることなし。きれいなれどもどこやら寂し。多きものは、寺女、雪踏直し、少きものは、侍酒屋、けんぞんや、生醉鷺、鳥かけ出し。（同上）

△爐開や燐糟にかへつ琉玖芋。と云へる句あり。作者出所不明なれど、ある古書に琉玖芋の讚と題したる中にこの句を見出でたれば左に、

「芋よ、芋よ。海上に出るとは仄かにきけども其の產土を知らざるなり。君子、國をしたひてや

らむ遠く琉玖より薩摩にうつり鄙の住居も心うくてや、九重の都にてたしてゐるや難波の市にも遊び其の状は、眠れる豚の如し。三性の苦しみは受けず、うづくまる鴨ににたり。父母を喰ふ不孝ものにも非らず。肥えたる事は、布袋の姿ありて、小兒も狎く、狎けば愛す可し。よつて地饅頭とほめし人もありけり。ふつつかものにてあざみ傳ふる人にくし。天味を彼になせり。皮一重のうまさをいかにせむ食して佳境に入ると云ひし顧凱之のみ彼を知れり。……『云々』とあり。

△富士山を女觴に比喩して左の狂歌をものせししやれものありき、

雪の中に鹿の子まだらの小袖きて

伊達をするがの御富士女郎かな。

△又煙草の銘とて

「酒にあらず、よく醉はず。茶に非らず、よく爽にす。食にあらず、よく饗かす。人にあらず、してよく伽す。」とあり。

△古人の扇子の銘に曰はく。

「昔は五明宮にひゞき秋をひく手の中。今は御みかげ堂になり、風をよぶ庭のほとり。」

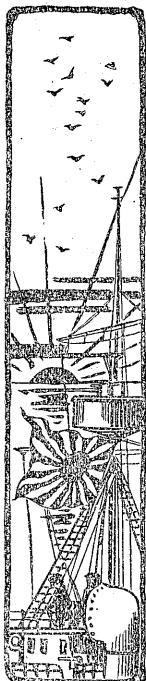
△百虫の譜に「蠍牛は、一生不往の浮かれ法師に似たり。みの虫は古みの引まとひたる釣り男、蚊とりは、工匠の風情、蝶は、風流めいたる寡婦の姿、金鐘虫は、千早ふり袖の巫子、轡虫は、武士の駿足に鞭を打つて馳せながら花に古詩を吟じ、古歌をものして馳せすぐる風情あり。松虫は、眉目清げなる小娘の子守りする風情にやあるべし。古呂林古呂林の鳴く音はすや／＼寝入りの伽

乳なるらむ。蟬は、仙人の象あり。五穀を食はず、風を吸ひ露をなめて夏山の木立に棲みわたり、世美世美と高吟しこれがぬけ殻は仙人の戸解にしとし………』とあり、面白き節々なれば此處に録しつ。

△油揚賣童。貧しき家の子等、提籠に油揚を入れ賣りあるきしこと寶歴年間に始まりしと傳ふ。

當時其かたち見苦しき童をみて皆人、あぶら揚賣の子のやうなりと云へたりしとなり。(完)

右は、そこの古書より漁りもとめしなれば大方君子に示すべきものにあらず。



文苑

ゆく春

斗

牛

臍氣なひとり言、せき入る聲が其まゝ絶えて行くかと物悲しい。

姉さんの病の床、衾には、わたしの罪の影が潜んでゐて、只でさへ苦しいのを、いや苦しさをまつてではないかしらと思ふと、空怖しさが一度に煽り立つて、窓からそッと一覗き、すや／＼と眠つてゐる痛々しい姿。

あゝ、幼き時の呼びくせを其まゝに、姉さんとは云へ、そもそも何の縁で、我爲に此苦勞ぞと思へば、勿体なさ、いとしさに、するゞと襟元をかすって、たら／＼と露の珠が。

蒲公英がほゝけて、蓮華が凋んで、そら豆の鞘が一寸程に伸びて、麥が眞青に、山も河も野も畑も、揃つて衣更へた、勝色の袷小袖。春のかたみはもゝ見たくても見られない、裏手の山吹がほろ／＼と散つて、はや卯の花と花勝見、いつもから、槽に這つた夕顔の、花に涼風ぬれしのぶ、

今年はそれも恨みわび、結ぼれどけぬかた糸の、亂れ苦しき胸の悩みを秘めてぞ、淋しう、来る夏、

に、素顔や見せん富士筑波、歌詠む人の筆すさみ、戀しる道とや二道を、心の逢ふた友燕、狂ふ

巴の其中に、ぢやらん／＼、鈴の音がして、白い泡を啖み／＼駄馬が裏手の往来に續く、馬子は長く手綱をゆるめながら、片手は懷つて啣へ煙管、のさり／＼と歩んで行く、鈴の音が幽に／＼、

と、差し代つて弱った水車が、だるい、ねむさうな音を立てゝ根氣よく、ぐるり／＼。

此里の夕も、暮れるに間近い。

一体、人の鼻をつまんで見たり、突き飛して見たり、びゞこにして見たり、目ゞかちにして見た
り、たまには牡丹餅で頬朧を叩いて見たりする、運命の手と云ふえ手のわからない手は、什麼袖
の中にかくれてゐるのだろー。

差詰め此川は運命の手、いかにもす直でない、くねりくねつて、丸折り、水上は、鷺の袖、立ち
かくす、戀の山。

たゞつかなくもわけをめて、むすぶ手の、雲に濁る山の井のあかぬ思ひを姉さん故、内と外とに
せきせかれ、いづれともひのつま事の、浮きねに立つや名とり川、世をうつせみのから衣、はら
はぬ袖にたき添ふる、涙いく度今更に、かうるべしとはしら糸の、十八年の其生涯！
痛むか智を睨と抑へて、背戸の川岸に立んだ、艶々しい黒髪、風が艶つて、いとしや姿はやつ
れたり。

斜にさした夕榮えあかく、川は鹽瀬に染め上げられて行く美しさ華やかさ、花の香に酔つた胡蝶の昔、儂い榮えのそれのやう。

綺麗にくしけづられた青柳の糸をすかして、江戸模様の粗雲、横に靡いた細い帶、する／＼

と解ければ、アレ、川の底をくぐってゆく。

と、薄れくて夕靄は、もといつか、田五作のなや、李兵衛の廻までも巻きくろんで、浮いた湖のやうな其中から、ひよこり首丈出してゐて芋七の桔槔が、今日も音なく立ち暮れる、聞けば竿が折れたとやら。

晝の間は眠つてゐた夜の眼の明星が、バッタリと見開いた。すらり並んだ芦にかくれて川下が、どんよりと黒すむ。橋のたもとあたり、燈火一つ、あれは、稻荷様。振り向けば向ふにも、是は、四手のかいり火。

淋しい、哀れなせらぎが、心の想と默契して、高く低くよきて返らぬ水の面、此世の戀をうち沈め、君とこよの星合や、契を頼む鵠が、取りもつ戀の橋の上、かゝれてしもさそふか風が、ゆするよ袂、ふりのそで、下に北斗の影浮かべて、うつる妹背の天の川。

凝乎みつめた眼に聞くや、刹那の影、冥暗の幻。
泌みくと悲しいもひ、其只ならぬ悲しい思ひが、込み上げてくるにつれ、いとくしく身にしむ姉さんの心づくし、忘しても、報ゆるは只戀のいえ、これ斗に姉さんのいたつき、思へば惜しからじ我玉の緒、代へて八千代に繋なませ、あゝ、もーとはに逢ふの別れ、さらば、姉さん。

心の聲がふるへて、二歩三歩。

盡きず盡せぬ恨に咽ぶ、現の定め、川の水、闇より闇へ流れ流れて。(完)

鳩が峰(紀行)

野田鳴水

松たかき枝もつらなる鳩が峰、曇らぬ御代は久かたの月の桂の男山、げにもさやけき影にきて、君万歳と祈るなる、神にあゆみをはこぶなり、神にあゆみをはこぶなり。

「ねー、左様なさいませ、斯様に雨も降りますし、路も悪う御座いますで、どうか左様なせいませ、今水を取らせますから……」

と良夫君の母さんは是非共今晚は泊つて行けと御勧めなさる、

「唯御好意は有がたう御座いますが、雨の降るもの、路の悪いのも覺悟で出たので御座いますし、又これから長岡へも寄つて來なければなりませぬから」

と僕と綠灣君とが言つて居る間に早や女中は盥と手拭とを持つて來た、然し僕等は良夫君とはたゞに學校でよく氣質も知つて居り、親密な間だけども、御母さんに遇つたのは、實は今日が最初である其の最初から泊るなんといふのは、實以て鐵面皮な次第だと口にこそ出して言はないけれども、僕と綠灣君とは、強つて其の御好意を謝して雨の降るのも容赦なく出かけた。

二

實に思ひかけも無い、僕等は此の八幡で、田中に居るとばかり思ひつめて居た其の良夫君に逢はうとは夢にも思ひ設けなかつたのである、實に意外であつた、僕等が木津川の橋を渡つて、「好い

加減に雨が止めはいゝが」などゝ語りながらやつて來ると、八幡宮の前の溜りで、雨がじと／＼降るをもかまはず、しきりに輪を垂れて居る二人の青年がある。僕は何とはなしに見た「あ、酷く宵て居る」といふ考が僕の胸に起つた。「フム、確かに宵て居る」然しこれが果して誰に宵てをるかといふ、この誰といふ考はまだ僕の胸には浮ばなかつた、

「然し確かに宵て居る」。

「さうだ／＼、木村君！」確かに木村君に相違無い、木村君の傍のが令弟だ。
「オイ君見給へ、木村が居るぞ」僕は小聲で話しながら、雨の中に羽織をかぶつて切りとうきを眺めて居る青年を指した、

「左様だらう」僕は再び言つた、然し綠灣君は之れが木村君であるやうにもあるし、又無いやうにもあるしといつたやうな眼つきで睇めて居る。さうだ、僕は思ひ出して、確かに木村君、彼は去年の冬から八幡へ行つたといふ事を中尾君からチラと聞いた、確かにさうだ。

僕は獨りできめて、獨りて首肯いて、綠灣君が尙ほ半信半疑の様子をも顧みず、「木村君」とやつた、果してさうだつた、木村君は「やあ……」と竿をかたへに置いて、いかにも思ひかけないといふ顔つきでやつて來た。

三
「どうだ、矢張さうだつたらう」

「さうだネ」

と僕等が語つて居る中に良夫君は僕等の傍へやつて來た、

「やア」
「御機嫌よう！」

之れで暑さ、寒さの御挨拶はすんだのである、

「雨が降つたのによく來たね、まあ僕の家へ來たまへ」と良夫君はてくてく歩き出した、僕等は時間が無いからと斷つたが「まあ好いぢやないか、今日は泊つて行け」と先生なからく承知しない、そんなら暫く寄つて來やうと、僕等は良夫君に従つた。

雨は又糸の如くに降り出して松の翠は滴るばかりである、其の滴るばかりの松の樹の間々に二本三本、植はつて居る梅の花の雨になやんだ姿は又格別である。

僕等は良夫君に従つて、一つの小さな流に架けてある橋を渡つた、其の橋のたもとに一軒の大きい家がある、家は宏壯といふまでは無いが、可なり大きい家で、何とはなくゆかしい品のある家だ、僕は何とは無しに實に好い家だなと思つて居るうちに良夫君は「此家ざ」と言つて其の家に入つた、驚いた、僕は良夫君が八幡に來てをるだけでも何となく喜ばしく思つたのに、その家が良夫君の居る家だと知つた時は實に愉快だつた、何故そんなに愉快だと聞かれたら、僕は答に困る、唯愉快であつたといふより仕方が無い。

「さア上り給へ」と良夫君は勧められたが、何分泥道をやつて來たので草鞋脚脛は早や泥まみれの僕等、もう此處で澤山と、玄關の上框に腰を下した。

暫く良夫君と話して居ると奥の方から御婦人の聲で、

「良夫、々々」と呼びなさるのが聞えた、良夫君は、

「はア」と言つて立つて行つたが、すぐ歸つて來て、

「君等今日は泊つて行け」と又言ひ出した、

「否今日はどうしても泊れぬ」と僕等は幾重にも其の好意を謝して、「今のは叔母さんか」と僕が聞くと、御母さんだと良夫君は答へた。

僕等は今始めて母さんに逢つた、良夫君は既に幼少の時に御父さんを失くして、それからは御母さんの手に人となつたのである、それは僕も前から知つて居つた、然し御母さんに遇つたのは今日が始めてである、

御母さんは丁度五十位の年恰好の方で、何となく大様で品のある御婦人である。

「ネ、さうなさいませ、御母さんが御心配なさいますと、そんなら葉書をな出しなされば今晚届きますから」と切りに御勧めなさる。

こんなに御勧めなさるのを、た斷りするのは、實に申譯ないやうに思つたけれども、到頭雨を冒して、八幡宮へ參詣を出かけた、御苦勞にも良夫君は案内をしやうといつて僕等を導いて呉れた。僕は京都の人間でありながら、有名な此の八幡宮に参るのは、今日が最初である、尤も一昨年だつたと思ふ、今村九穂君と桃を愈治に尋ねての歸途に、夕靄の中に男山の姿を眺めて、山崎の停

車塲へ急いだことがある、が其の時は素通りをやつたばかりで、實際脚鳩ヶ峯の土を踏むのは、今日を以て嚆矢とするのである。

頓に僕等は山をも登り終つて所謂八幡宮に詣でた、雨は猶ほ止まない、松杉などの綠のこぼれるうな間に朱塗りの樓門のいかにも映えて見えたのは實に美しかつた。

何處の八幡宮にも決度、鳩が飼つてあるが、こゝにも矢張規則通りに多くの鳩が僕等を迎へた。

僕等はこれも旅の一興と早速人の好さうな老婆さんから麥を買つて與へた、實によく馴れたものだ、鳩先生少しも僕等を恐れない、或る奴は僕の肩に飛んで來たり、又或奴は僕の手に止るといふ仕合實に可愛いものだ、僕等はさんぐ鳩に戯れて、殘り惜しいながら良夫君が、「好い加減に止さんか」と言ふやうな顔つき（これはウソ也）して居るのを見て、

「さア出かけやう」と歸途に就いた。

五

此處は吾か友良夫君の書齋である、前は男山の碧翠欄に迫るやうで雨中の景色は又格別である、放生川の流は緩かに此の家の麓をめぐつて、庭さきの紅梅は今方に盛りである。

僕と綠灣君とは今此の趣ある良夫君の書齋に主人と共に鼎坐して、樂しき四方八面の話に余念がない。

僕等は八幡宮の參詣をも終つて良夫君と分れ、木津川の橋を渡らうとする時、雨は一しきり激し

くやつて來た、さアたまらない、見る見る、和服姿の綠灣君は全身濡鼠の如くなつた、弱つた、實以て弱つた、然し男だ、あれ程良夫君の御母さんが勧めて下さつたのを強て断つた僕等だ、行けく、男だ、此れ位の雨に男が三・すん／＼行きかけた、あー無益だ、雨はます／＼激しく其上に風さへ吹いて來た、仕方が無い、今日は泊らうと、オメ／＼否男らしく引き返すこととした。全權公使は綠灣君が其任に當つた、勿論御母さんは快く御承知下さつて、「さア御上りなさい、此の雨にあなた御無理で御座います」となか／＼御深切である。

此の如くにして僕等は今良夫君の書齋に火鉢を囲んだのである。

六

良夫君は去年の冬から健康とく勝れず、終に醫師の勧めに従つて空氣清神なる此の八幡に病を養ふこととなつたのである。

僕はどういふ譯か、田舎の生活が非常に好きだ、さうだ考へて見れば理由が無いではない、僕は都會の眞中に生れて、都會の中で人となつたのであるが、然し小供の時から始終田舎の親族の方へ行つて居つた、だから自然田舎の生活に趣味をもつやうになつたのだらう、それにしてもなせ、田舎の生活はこんなに面白いのだらう、そら僕だつて年が年中、田舎に居て暮せと言はれたら、その時は田舎の生活も厭氣のさすは必定だが、一ヶ月や二ヶ月の間、紅塵万丈の都の眞中から、空氣の清い、水の冷い田舎の天地に飛び出して見る時の心地、たまつたものである、然し田舎も田舎によりけりだが、僕の故郷の田園の風色といつたら、之れは大したものだ、市からしさに堪へない。

一里東へ行けば白川の里、比叡の御山の溫和な姿を見ると、慈愛深い母親の懷を想はずには居られぬ、里はちやうど比叡山の麓で、村の少女は、清らな姿にまだ露の干ぬ花を、朝霧をわけて京の町へと賣りに出る、其の服装の具合、言葉のさま、平安朝の昔をそのまま、猶進んでは淨土寺、一乘寺、修學院の村々、名を聞いたどけでも忍ばれる、北には上加茂、岩倉、八瀬、大原、西は嵯峨野、嵐山、三尾の勝、南に行くも宇治の茶摘み、木幡の里、茶人ならぬ僕等もゆかしさに堪へない。

春は花の曙、清少納言を待たずとも、此の武骨の僕等、遠山の霞を分けて鶯の聲を聞くと、何だか心も浮き立つやうで、詩趣の何のと六ヶシイことは一向知らぬが、たゞ氣も心も愉快でならぬ、ましてたんぽゝ、すみれの咲き亂れた、いさゝ小川の畦に横になつて、菜の花の中から一つ二つと飛び出す雲雀の歌の、雲の中へ消えて行くの眺めて居る時の心地、また親族の誰かれ相誘つて、今日は何山の土筆取り、明日はかしこの丘のわらび狩、さては家の前の小川に輪を垂れて鮎を釣るのも愉快、蟹の頃は言はずもあれ、星稀なる夏の夜、鎮守の森に梟の聲を聞くのも決して悪いものでは無い。

秋は黄昏、心なき身にもと感る坊さんは言つたさうだが、實に心なき僕等にも、世のあはれは知られて、よしや鳴立つ澤に立たなくとも、紫の煙が搔曳枯木を纏ふかと思ふと、釣瓶落しに日は暮れて、鎌のやうな三日月が葉の落ち切つた雜木林の上に懸る時、さては五位鶯が帛を裂くやうな聲で、頭の上を掠めて行く時など、數へ立てるときりも無いが、秋の田舎なか／＼捨てたわけ

のもので無い」

天地一白の冬の夜、戸外とでは吹雪の音が物凄う聞ひて居る時、爐のまわりに家族團欒して、芋でもかじりながら、四方八面の談に夜を深すのは、是れ亦なかくの愉快である。僕は何時もく談半ばに居眠りを始めて、毎夜く親類の姉さんに寢室へ連れて行つて貰ふのであつた、「敬さんはなぜ毎晩あんなに居眠をするの?」とやさしい姉さんに問はれて、「だつて居眠なんかしやしないんだけども睡いんだもの」と譯のわからぬことを言つて何時も人々を笑はせて居た、時には此の爐の周囲で、歌加留多の始まる事もある、此の時も僕の好きなあの姉さんが一番強かつた、僕だつて取れないことはないと強情を張つて、姉さんを困らせたことがあつた、あ、何が平和だといつて此の田舎の冬の夜程平和なものが世の中にあらうか?

あ、田舎々々、田舎ほど好い所はありやしない、僕は田舎が好き田舎の臭が好きだ、御母さんの懷を除いては、田舎程なつかしい所は何處にも無い。

良夫君は今此の羨ましい生活をやつて居る、木津の堤には蓮華草が花毛氈を敷いたやうに喫いて、鮒は放生川に躍つて居る家にはやさしい御母さんと、可愛い弟妹あり、外出ても家に歸つても、たゞ平和、たゞ満足あるばかり、世にも幸福なのは良夫君昨今的生活であらう。

七

やがて夜となつた、雨はしづくと何時止むとも思はれない。

僕等はつれぐなるまゝ、良夫君に頼んで、良夫君の妹君シスターに琴を一つと頼つた、

初め妹君は絃が緩んで居るとか、何とか言つて居られたが、良夫君が無造作に「彈れ！」と煽動的命令を發するに加へて、僕等が又一方から頼んだから、妹君も到頭一曲やるといふことになつた、

雨は猶ほ降つて居る、軒の玉だれの音さへ手に取るやうである、やがて美はしき響は静なる四邊の空氣を通じて起つた、悠々として起つた妙なる調べは、雨に行き暮れたる僕等の疲を一時に消して、僕は實に其の時、僕が八幡に居ることも、琴の主の誰たるかをも忘れて、唯美はしく妙なる調の、やさしき歌聲に連れて、吾耳に傳はるとばかり覚えて、吾が身吾が心、そのまゝ夢の中に在るが如くであつた、

残り惜しくも琴の音は、はたと止んで、僕も俄に夢より醒めたやうであつた。

八

次に僕等は良夫君、御母さん、妹君など樂しき團欒きよぜんを作つて、いろんな事を聞いたり、話したりした、御母さんはいかにも深切にくさぐの話をして僕等を慰めやうと勉められた、男山の春、木津川の眺めの美しいことから、八幡合戦の有様、さては此の家(僕等の泊つた家)が其の戦争の當時、薩軍の本營となつたことやら、軍法に叛いたものを、良夫君の書齋からも見える、あの六本松の下で刑に處したことやら、あらゆることを話された、後に僕が君の御母さんはなかく學者だなアと言つたら、良夫君は笑ひながら、「みんな此處の老人に聞いたのだ」といつた。

良夫君は始めから沈黙を守つて謹聽の態度を執り(元來良夫君はあまり喋る方の人では無い)、妹

君は時々可愛い事を言つては、僕等の會話に花を添へた。

あゝ實に面白かつた、今から思ひ出しても實に愉快だ、御母さんはあんなに深切で入らつしやるし、良夫君は元來、僕も好きな人だし、妹君も僕は大好き……笑つちやいけない、好きはどうしたつて好なのだから仕方が無い。

僕等は樂しき話に夢中になつて、時間の経つのも知らなかつた、雨はなほしと止む景色も無い、四邊は實に静かである、唯聞ゆるもののは放生川の流の緩かに家の根を洗ふ音ばかりである(三十五年三月稿)

大様で、親切で、物事によく氣のつく良夫君の御母さんは、老幼不定のたゞへに漏れず、まだ老年といふ程でも無いのに、去年の夏、「かげらふ」が夢のやうに飛ぶ夕、到頭あの世人となられた、何時行つても、「また、よく入らつしやいましたね」と満顔の笑を以て、僕等を歓迎して下さつた、此の御母さんは、もう此の世の人で無い、思へば唯夢の心地、一寸會つて「たゞ々御邪魔をいたしました」とたゞの一言言いたくも之れも出來ず、せめては色々香も無い此の舊稿でも引き出して、手向の水に代へんとて。(三十八年三月追記)

白雨日記

鷗

夢

第一信 (六月二十二日)

いよいよ此家に落着くことに相きめ申し候。町はづれにて田圃近く候へば、初夏のけしき一々物新らしく候。

夕かた尺八を聞き申し候。吹手は當家の小作爺、中々の上手にこれあり候。なかんづく追分の一句こそ云ふばかりなう嬉しく候ひけれ。一昂一低、絶えむとしては續き、げにも泣くが如く訴ふるが如きその響、世に大詩人の雄篇よりも、このはかなき老夫のすさびによりてぞ、人情の深き嘆きは身に沁みて感せられ候。この爺はまた端唄など謠ふことにも巧者に候ひて、聲は乾らびはてたれども、さすがに裏悲しき一ふし哀れをこめて、何となく涙も催され候。

今は夜も更けたれば家をめぐりて蛙鳴きつづけ候。快く寂しきその聲、いつもわが夢をさそひ候

はい、小生も甚だしくは墮ちつくすまじく候。音曲ほど心を清め思を慰むるものはござなく候。けさ臥床にありていつもの如く愚かしき空想に耽り候。眼覺めたるは七時、起き出でたるは九時に候ひき。

終日たゞ暑くこそ候へ。

文苑

この四五日がほどは暑いばかりにて何の興も候はず。

薄雲を透して日は蒸暑く照りつけ、道行く人は喘ぎて病者の如し。輜重車一列軋り過ぎて、跡には砂埃ましろに舞ひのぼれる、毒々しき大路の晝なり。

右はきのふ南町へ買物に出でたる時ありさまで候。

宵のほどわざわざ片町まで散歩いたし候。いつもながら賑はしきところ、老幼男女ひきも切らず行きかふさま、さすが金澤一の繁盛に候。折から出征せむとする軍隊の一中隊ばかり通り候ひしに、街上の人は皆々町の兩がはに立ちて、帽子手拭など打ち振り打ち振り、日々に万歳を連呼するを聞けば、しかすがに言ひがたき熱情胸に迫りて、ゾッと身震ひいたし候。華やかなる出征の裡には、時にいたましき悲劇も潜めることも思ひやり、そぞろ物悲しく相成り候。戦争の前にはすべて些細に見ゆることに候。

第四信 (七月一日)

再び『うなばら』の詩をものし候ひしかど、前のよりは遙かに劣り候。

詩かく人は心尊かるべく、思ひ清かるべく、なかにも靈魂すくよがなるべき筈なるに、この頃の小生は申さうやうなき野鄙賤劣の小夫、よき詩のできぬは當り前に候。いにし十年がほど、善く美しき時はつかのまにて、醜く悪しきは常なりし身に候へば、いつにして自ら崇むるばかりのけだかさを得候はむずらむ、思ひ到れば、そぞろに涙せきあへず候。

第五信 (同三日)

雨そぼ降る、涼しき日に候。

何となく不満、不安、脳漿凍るが如くまた沸くが如くに候。あるじの婦にどこか病めるに非ずやと尋ねられ候ひき。

書過、友の訪ひ来て例のくだらぬ雑談。かいこを見て感あり。人生もまた此れ、別に大した事も候まじ。變なものに候。

第六信 (同四日)

わがたゞひとりなる友よ、君は人の世を戯れの芝居とねばし給ふか。さなり、いづれは夢の戯れ、たかしげなる田舎芝居とのみ見られ候らむ。あゝ夢か戯れか、このはかなき戯れに我を忘れ、夢に夢見しはては、空しく死にゆかでは叶はぬ人の運命、何をか笑ひ申すべきぞ。いとも苦しき夢、いとも悲しき芝居、人とし人はみな其役者となり、その夢を結ばでは叶はぬ身の上に候はずや。冉々たる征途の間、誰かよく笑つてのみ過ぎむ者ぞ。小生はたゞ泣きに泣かむと欲するにて候。

色に慾に迷ふ者よ、榮華に功名に慄るゝ者よ、はたや悟道安心の願ひに思を苦め心を勞する者よ、その得たるもの得ざりし人も、共にこれ無限海上の一葉舟、嵐にもまれ浪に弄ばれて、いづくを岸と指すよしもなきわれや人や、誰をか笑ひ誰をか嘲り候べき。思へば悲しからぬはなき造化の戯れ、慘忍なる神に捧ぐる祭禮の芝居、役者たる人はやがて犠牲にこそ候はめ、小生は泣くより

外に詮なきに候。

第 七 信 (同 七 日)

この頃の夢見のわるさ、何か大病の身うちに潜める如きこゝち致し候。けさ曉方には續けざまに四たびまで夢み候ひぬ。ひとつは恐しき妖怪を退治したる夢、ひとつは血を喀きて仆れたる夢、他は忘れたれどもそれく厭な夢に候ひき、眼ざめて見れば日すでに高くして、蚊帳のぼんやりと怪しげに吊られたる、物凄まじき感じもいたし候。

きのふに引きかへ暑くるしき天氣、一日濛々として暮らし候はむ。小生もひゞく惰弱に相成り候。

第 八 信 (同 九 日)

野のきわみ眩まばゆき光あふれたり千草八千草たゞ眞白にて

あゝ夏野をかけ廻らばいかに愉快なるべき。見わたすかぎり白光、綠草、焼やきくが如き熾熱まことを眞面に浴あつびて、小川を飛びこえ、田畑たばたを踏みわたり、蛙をつり、そんぼを追ひて、無心に嬉々と戯れなば——あゝわが夢は夏野の光に懾るゝに候。いま家をはなるよ十歩にして、はてなき夏野をひかへながら、われにもあらで、この蒸暑ひんしょき一室に戸を閉ぢかためて籠りゐる狂はしさ、御憫笑くだされたく候ふ。

老兵か思ひ

六 の 花

時やいつ?、處やいづこ?、

今宵しもきさらざ初めの寒風骨を刺す中を、夜間勤務の演習すべう今粟ヶ崎村端に到着せる一隊の兵士あり、隊長は太き聲にひゞき打たせて演習の想定を下せり、斥候は命ぜられたる方面に、歩哨は定められたる位置に、配備夫々に定まりては、又聞たる音もなし、一しきり梢をなぶる木からしの颶と音して吹き過ぎぬ。

二、

見るかな南の方、連亘起伏する白山つゝきの山又山に、僅に入り殘る夕日の美しう映えて、こゝかしこの村里よりは炊煙縷々として上る、脚下はるか、地軸も碎けよと寄せ来る大浪、巨巖怒りて、白沫高く、よせてはしづく荒波に、射下す夕日、空の金色、海の瑠璃色、萬物凡て光あり、小松しげれる磯山の端、我は今歩哨に立てり、身にまとふカキイの戰服うすればにや、波の二千里日本海越えて吹き来る風の寒ければにや、膚粟立ちて銃持つ手の凍りやすらん、今は感覺さへ失へり、さるにても此手の皴よれる事よ、自らには見ぬ我か顔もさこそと、あごの邊り一なですれば、髪々たる鬚鬚のたゞろしき迄のびたるに、われながら驚かれて手を引けり、あゝ其ひげも今は白きを交へたるにはあらずか、寄る年波にさても腑甲斐なき身とはなりけり

な。

指かゞなへば兩手に二度よ、喇叭の音、帶劍の響に、春秋三とせ兵營生活終へし頃、赤條入りの軍服姿我ながら雄々しとこそ思ひしか。去ぬる甲午の役には我も若かりき、忘れもせず八月の六日一、赤箋手にして勇める折は熱血五体に燃にて知らず武者振一つ、嘗ては謳はれし白ヅボン隊の一兵として、霰たばしる金州の野に、逃る豚尾兵をも追ひたりき。撰りに撰られし名譽の斥候となりて、頻死の境に出入せしも幾度か、「なきもの」と君にさげし命も、武運よくてか悪しくてか、恙なく再び故郷の地を踏める身の、身にあまる光榮負ひて、村のまとひに、戦さ語りの興も添へき、さはれ、吾等が戦友の血と骨とに代へし遼東の還附を聞きては、身も世もあらず嘆き悲み、其折より事あらばと思ひ込めるに、さても今、あゝあさましき迄老いにけるかな、齡も四十！四十武者。

三、

去年の春、春とは云へど寒國の、降り積む雪に往來くだら、山河草木只一白、人は皆帽火たく爐を圍みて、團欒の夢まごかなる頃、

霹靂一聲大詔は傳へられ、隣村のそれがし同村のくれがし、豫備にある身のさて勇ましう笑をふくみて征途に上りぬ、羨しこそ思ひしか、一とせは夢の間に過ぎけるよ、海は海に、陸は陸に、至る所に皇軍の勝を報じて、賤の苦屋も、金殿玉樓も、なべて歡喜の聲に充ち満ちて、薪こる山賤も、藻塙たくあまも、ひとしく祝勝の酒に酔ひたりき、されど勇みて出征ける兵士の中、今に

殘るものそも幾人。わか知れる誰もかれも、或は盤龍山に或は松樹山に、あはれ朝露とこそは消ゆにしか。重きつとめに倒れし身の、笑みて此世を去りしとよ、さはれ彼等か遺族の態や如何に、云はぬ悲、泣かぬ涙、そはよく人の知り得べきか。

日は沈めり、暮色は追々に迫り来て、遠の山々は暮靄の中に消行かんとす、あゝかしこに見ゆるかの山の、その山又山のかなた、かなたの山のその麓こそ、戀しき我か村、妻や如何に子や如何に、まして老いにやつれし父親のさて如何に、あした朝日に迎へられて野に出で、夕は星に送られて歸る夏のつとめも、櫛火たく爐のほとり、手仕事に餘念なき冬の夜も、一家團欒の笑顔を見ては、浮世の願、そは何か、

去ぬる日！我も十年の昔にかへりて、鍔もてる手に劍とる身となりて家を辭せる折、わが去りし、後の程も見にすきたるに、心強くも妻は云ひぬ。「人にな劣り給ひそ、うるはしき勳功立ててがく」と、老いに力なき老父をば暇乞せし時、せき入る聲に力こめて、「汝は果報者よ一生に而も二度晴れの戦さに出ることは、あつぱれ御國の役に立て」と、

我れも男の子、「願はくは忠勇の花と散りて、報國の誠を致さむ」と、心強くも云ひ切りて、見送る里人に送られて郷は出でしかざ、扱も未だ頑是なき兒等幾人、老い給へる父上、妻よ此さき如何に暮し行かむ。

四、

思はじ思はじ、我は今陛下の御楯となりて、御國の爲めに働く身にはあらずや、我か肩には國

家の運命を荷へるにはあらずや、女々しき縁言は武夫の面目を汚さずや……「あゝ絶ち難きは恩愛のきづな?」と思ふ心の下より、目に見るは軒傾ける我家、老父が面影!死するか武士の常とは云へど、秋の夜半霜ふみ分けて、妻戀ひになく小牡鹿もあるものを、焼野のあとに子を思ふ、きじすも世にはありとかや、見よ、落葉をくじり、岩に激し、海原として流れ行く谿川の水も、雲となり霧となりて、故郷の山には返へるにあらずや。

されどく、八代の村の土耕して、八代の村の土に歸り行くべかりし我なりしよ、此さき生きて幾させか、春の種蒔き秋獲りて、さて何の仕出す事のあるべき…………さなりく、勇ましく戦ひて、よしや屍を異郷にさらすとも我は我がつとめ果せるなり、國家の礎ともうたはれん、君が御楯ともたゞへられん、散る櫻花にも類へられて、今は只征途をのみぞ待たる。

五、

日は既にく暮れて四面暗澹、海は狂ひに狂ふらん、鞆轔の音耳に冴えて、脚下に躍る白龍は、それよ潮路の潮頭、

大空に星まばたきて、夜は更け行きぬ、交代の時に間もあらじ。(終)

石燈籠

籠

水

の

人

『夕べも姉さんと御参詣したの、ね、月がこうまんまるで小枝と小枝とにはさまれてるんでしょ

う兎が餅つくてまにちよいく松葉をひくんだもの、可愛のね、十五夜の月さん
權爺が小鼓の音しばしと絶じて天空遙かならず澄み渡る謡の聲にふりあふぐ額を斜にしてはら
くと玉露の二つ三つ足もとにこぼれだる、更にきく、そは風のみの松のすきなりき
ひとつ半球に土積まれたる小山の上を、高う神さびの老松枝を交へ低う二尺のたけにのびたる
ほとく一面の榼叢、この前あからさまに屹として立つ二丈ばかりの苦むしたる石の墓標あり、文
字あざやかならざるにはあらねご榼の外より何々の朝臣と辛じて讀まれうべし藩祖三代の御廟
夏は宵ながら、はしに筆むすびたる一間あまりのから竹を肩に、螢狩のかへさ、美しき叔母上
にふと出會ひまゆらせうちつれたちて二町あまりの院の敷石の上に辿りたるが月なき夜なりけれ
ば此敷石の兩側にゐならぶ數五六十の石燈籠の中唯二つ三つ燈されし細き光の物凄きにいつしか
足もはやう、叔母上の駒下駄の音石に牙えて高からぬ松の梢より露のしづくと草に散りたる、
折しもほとゝぎすの一聲近き御廟のわたりに聞えき

その頃叔母上いと健やかにゐませしが三日あまり經しある小雨の旦、ふとの風邪に自ら培養給
ひし朝顔の花ひと辨も見給はで其次の日の夕露とはかなくなり給ひしを初七日にひそかに母上に
問ひまゆらせしに淋しう微笑み給ひて唯石燈籠とのみ、かさねて尋ねむとせしが例の事なればひ
しと胸に念じつ

八幡の境内はこんなに石なんか敷いてないけれど石燈籠は澤山あつてよ、右つかはの三つ目の、
うしろに手洗あるでしよう

我はちさき胸に愕然とせり、けふ叔母上の百ヶ日とぞ云ふなる

緑濃き椿の葉の露もたびさるに日の光きら／＼ときらめいて樋もてひきたれば満々と緑のこぼれた手洗の水の射かへされたる、物覚えわろき我心にも石にさざまれし洗心の二字あざやかなり

じいつと月さんを見るとあの手洗の水の底でちよろ／＼つていふ音、そつとしたわ、いゝゑ蟋蟀じやないの水の中ですもの、

姉さんツて呼ぶと返事が無いでしょう、はつと思つてまた呼んだの、憎いつたらありやしないわ、そつとうしろに立つてゐんだもの、耳に口あて、「しつ」て云ふのよ

月は上りぬ權爺が小鼓の音一きは高くこそ聞えたりけれ、松の木疎に月斜なれば白う敷きつめたる石の上屈竟の場所なり、月あかき夜なく十二の信ちやんを頭に入歳まで十四五人ぞ集まつたりける、

雪の如き石の上に墨の如く黒ふ書き出さるゝちさき影法師を追ふ遊びを催すなりき

この敷石のはてに藩祖の御廟うち並びたるが高さ三尺の土堤と幅二尺の小川とを距てゝ奥の院より田二町ばかり南に八幡の宮あり、その折は母上の訓誡のまゝ唯ひとたび叔母上と参詣せしのみ、蟹狩のかへさ、このわたりにあひ參らせしは畔道なれど近きものから此宮にまうでゝの歸路なりしならむ、男の子はゆかぬものぞみせりと云ふ源氏名の下婢の眞顔つくりて我に告げしををさな心にもけしうたほえしかば御廟のうしろに松葉かく權爺に問ひたるに、そは靈しき石燈籠

のいとけなき男の子を捕へて手洗の水に浸すなればなりとから／＼とこそ笑ひしか

恐ろしかりければ鳥居にさへるよらざりき

姉さんね宮？大丈夫、送つてあげよう石燈籠なんかわかないや
境内へさへはいらなきやいゝんだ

ほんとうにこわいのよちろ／＼つて、今夜もきつとよ、十五夜と十六夜とに限るのだつてね、肩に手をかけて水の上をじつと見詰てる姉さんの横顔、ほうら月が冴えるでしょう、あたし大姉さんだと思つたわ

けふ叔母上の百ヶ日とぞ云ふなる

いくんじやありませんつてお母さんた云ひなすつたけれど、何だか心配で／＼仕様がなかつたもんだつたからそつと背戸口からかくれて來たの、そのまゝずん／＼ゆけばよかつたのにふいと胸に浮ぶんだもの

此の時我松の木蔭について名を呼びて更に驚ろかせしなりき

月よし一天雲も見えず、やがてぞ影法師遊ぶ仲間の集まる頃なる、奮然としてみんなみの方五歩を進めしが木下闇なれば程遠し、黒きものゝ足音輕う來れる、身長其人に似たればあなやと思ふ程に、ほそう唯一聲ぞの給ひし…………すみね

すみねとは妹の君の名なりき

しうかけよらむとせしが露深き芝草の上に足浮きてはたと膝折りつ
男兒だい

背後に銃き聲あり、厚紙もて折りし鳥帽子すみ黒々と、圓う銀紙の日を戴きたればさら／＼と
こそ月に映つたりけれ、右の手にさゝやかな軍扇をひかへ左の手にしかと竹光の鞆くだげんば
かりに握りつめ眞白の敷石の上につつたちたる信吾中將の御後、兩斜に雁形をつくりて十人ばかりぞかしこまつたりける……男兒だい

軍扇もて丁と胸を叩きつ、ぐいと願をひいて左右を睨めまはせしこき居並びし兵士の鎧の草摺
がさ／＼と音しぬ

この時は、ゑみて見てゐ給ひし姉の君つか／＼と前に進み給ひしを大將軍きつとなりて、やい
石燈籠の花女郎、やい

さと顔色を變へ給ふと見るに鬢の毛のゆらめいたる、風なればあやしこそ見しか
ものも、の給はす

左に妹の君右に我、つきそひまるらせて組み合せし御手冷に石の如かりし、あはれきのふやう
やうたちさりし夏の空を折しも澄みわたる雁の初聲

送林櫟窓游清國序

村上函峯

士名而商行者。舉世皆然。商名而士行者。吾獨於我友林櫟窓乎見之。櫟窓本名古屋藩士。與
余先後學于毅堂鷲津先生。治經好詩。余常服其重信。中興之初。櫟窓出仕工部省。人皆期
其榮進。而幡然棄官歸商。開書肆於輦下。多藏奇書。贏利不少。豈非商名而士行者乎。頃將下
游清國。益擴張其業。夫游殊域。費用極多。故多待官資。今櫟窓以一商賈。不仰官資。獨力爲
此游。何其志之大。而氣之壯也。凡商有機權。其博利雖多。要在一信而已。歐米良賈
無不然。乃櫟窓已重信。而以商游。則四海之内。固無不信也。況於下與我邦同文舊盟國上
乎。然則櫟窓航彼土。左提右挈。有無相通。彼此互利。不唯得一身之利。遂盡善隣貿易之利。
則商賈之所以報國家者。不亦大平。且此游及西湖荷花之候。探白蘇諸公之舊跡。假助於名
山勝水。其興發于歌詩者。必不一而足焉。則其爲樂固非尋常商賈所能及也。櫟窓將行
告別乞言。余於櫟窓交誼有年。故櫟窓亦知余言有信。乃書以爲序。

新体詩

わがかげや 痩せねると

ひと知れず 戸により

月下香霞

影法師

水衣

近うして 影法師

うつさせぬ 梅月夜

うすかりと 戸をはなれ
みぎなごめ 大踏こえ

友が領 白壁に

ためらひて 影法師

小風吹く 花は散る

れく深う 口ずさみ

書讀んで 入興すと

恥ぢらひぬ 影法師

霜の夜を はしのうへ

うつゝなく たゞすめば

けふこんの 雁がねや

肌寒し 水の音

橋の上

まちわびし 雁の聲

いく夜經と えぞ聞かぬ

よべの夢 まさなくば

とばかりに はしの上

桃緋桃

小夜のみの 詩に捲じ

つとめてぞ 春彌生

燭せねば 有明の

ほの白し 窓の月

花はやど 床のうへ

靈しき香に さやめきて

桃緋桃 厚化粧

ひとさしは 舞姿

夕榮の 雲散りて

氣も澄めば 空しづか

ひたすらに 耳立てぬ

矢さけびの 聲すかと

夏はよひ 月は三日

旅衣 さながらに

かきあはす いまごろを

わたりゆく 雉の聲

未森城

矢と歌

(ロングフェロー)

空たかく 射し小矢は

いづかたへ 舞ひ落ちし、

疾く飛べば えこそ眼に

うつらはめ そのゆくへ

道に聞き 馬子かへし
草わけて たゞひとり
辿り行く 道すがら
折からぬ くつわ蟲

空はるか 詠せし歌

いづ方へ 落ちゆきし、

影もなき 歌なれば

誰かたふ 靈しき眼に

うすひらの 水れもなく

ひきくこそ 流れしか。

骨だちし 森樹立

一葉だに 散りつきぬ

日頃経て 横に見ぬ

そのままの 矢一筋、

さて歌は あきらかに

さもの胸 たくふかう

うべきむ 地の上に

一ひらの 花もなき。

静かなる あたりには

たゞ響く 水ぐるま

霜枯(シエレ)

霜がれの 木の枝に

なき夫鳥を 慕ひては

歎きぬる 鳥一羽。

こほる風 空高う

君は小田原の人平素寡言獨立獨行人を嫌ふかも時に

諧謔を弄しき

暮の十二月二十九日君病床に臥して一月二日前九時

永眠し給ふ

この日午後旅順陥落の報全市に傳はる

師三人同級の友の市にあるもの十三人三日午後一時棺を泉

火葬場にねくるゆく／＼雨そば降りて止まず薊水川橋上に

悼山口容之助君

りし時相がへりみて悄然夢の如く棺にひそそひ、わ
くるみちかへるみち十六人聲をのんで一語をも發するもの

なし、あゝ君遂にかへらず

六日父君の遺骨を抱いて故郷にかへり給ふに

あゝともよ いまさらに

名に乗らん すべもなし

われらかく ひれふして

たゞとはに いざさらば

君に送る 一輪挿

加賀人が誇りとすなる

九谷焼の其燒模様

秋草の亂れ咲きなり。

加賀にて

桑

一輪挿を贈るにそへて

枯

桑

糸すゝき穂は金ぢらし

女郎花枝たわやかに

萩こぼれ菊うなたれて

木芙蓉眞紅をもやす。

飛彈信濃雲の山々

君が住む吾妻は遠し

かへる身の きみなれど

あゝひごめ などごめん

京風ぞ此處には流行る。

今送るこの花瓶も
京風の凝りし所ぞ

酒を好み淡をこる君

只恐る氣に召すまじを。

下

何さすも君が意なれど
願くは君御手づから
野の中に自然の御手に
咲き驕る花ばし折るな。

御手づから折りし其花
この瓶に弄むを見なば
ものなべてやさしき君が
深き悔い残さざらめや。

君が凭る窓の下には

朝毎にはた夕毎に

菅笠にくけ紐赤き
花賣りの乙女呼ばんに。

聲きかば空に過ごさで

一枝は君買うて挿せ

銅臭とさもしきものも
かゝる時詩にあやからん』

夕 映

あゝ寂しかり長らへば
また來む秋に占問はむ
葡萄の色の夕映は

二人語りを禍神の

戯れ懸想に彩なすと

寝轉ふ野邊の寒げくも

ま、か、

秋を我世のほゝゑみに
静けく昏るゝ空高み
あまりに君ぞ若うして
嫉しあはれは知らざらむ

黄ばめる日影香に負ひて

爪に彈ぢける草露に

繪の具を君の落しつゝ

輝ける眼眉を向くる時

さこそ夕は映えにしか

雲の奇しきを懷ひれもひ

我に葉笛の歌あれど

風瀟々と吹き來して

微吟いたづらにあふ亂れ
我なり世なる夕映よ

宿運の天啓嚴かの
入日こひのむ我問はで
筆の柔毛を囁みしめて
彩さまゝと感ふめる
君夕映の秋の笑み

野末に遠き森聳り

夕映あゝ今し墨みたり

並み居の君やけらくすと
昔に外れて寂しかる

我な我たまよばはりそ

あゝ若人をうつこひの

驕りに誘ひあざむとよ

禍神秘めて彩なすと

赫やくいかでとこよなる

あゝ寂しかり秋の夕映

乙女に興ふ

葛

衣

西夕陽の沈むとき

斑らにかゝる雲の色の

まばゆく清くひかる見て

うつくしこのみ思ひてし

君の昔のあぞけなさ

秋の夜清き細道を

やさしき君が姉君と

草葉にすぐく虫の音に

耳そばだてゝ君はたゞ

をかしこのみぞ思ひける

琴かきならず指先の

夕の橋のたばしまに

流るゝ水のまみ見ては

踊る血汐の音高く

胸落付かぬ思出の

いつとしもなく宿りしよ

やをらか細きうなじをば
やさしき手もてなでまし

母君をしも君はたゞ

此の世の神と思ひけん

幼な昔もありけるよ

時は來りぬ世の波の

嵐にふれてあれすさむ

君をたゞへば春の日の

光にふれてなき出づる

深山の谷のうぐひすか

あゝ君をして野を走る

小川の岸の若桃の

嵐にふれすけがれなく

春の自然の氣にふれて

やさしく清く咲かしめよ

入相

(一)

隈東生

彩雲夕陽に燃えて

日は昇きぬ西山のあなたに

身に餘る榮譽をほこる

武士の閨門に歸るが如

(二)

惆悵の吟長し草笛に

夕調哀多くして天暮れ難し

静かなる天地、水嚴いのちを喰めど

光薄うして聲を包む

黄昏の闇を縫ふ鐘の響
別れを惜む鐘樓守

無韻有情の思を草む

(三)

咒の炎に怨靈の威をかりて
染むる夕の西の空

桎梏に勞れて今歸る人

振り仰ぎて指させば

紫の星一つ光をかすむる

(四)

野の夕、鐘遠く流れて

牧人聲高し牧場の暮

寒草香なく影やせて

翔りゆく鳥の彩羽に

ゆふ日の光斜なる

(五)

夕暗淡く燈ゆらぎて

馬嘶かず鬱たれ

蹄轡の音輕く
手綱緩めて鞭あげす

衣冠系はたつ

征矢に懾める鷺の如

裂けし皆掩へど尙

無量の思殺氣こめ

拳に握るは汗か血か

鬼ども見えて帰吐く

血なき唇笑めど見よ

刃を植ゑて槊を張り

鐵條電流火箭火車

銀の高壁鐵の城

將軍 守るは哥索克狙擊隊

不知や難攻不落の地

見ゆる精舍の奥深み
誦經うすれてうつゝなく

月を擔ひて立つ僧の
胸に血沙の湧かすあれ

(六)

詩興のすさび杜黒く
微笑立てる公孫樹

鳴き行く鳥は友もなく
暮れて明るき山の端に

星を導指に旅出するなり

將軍來る

征露將軍

閃めく鉄！ 鞭走る音！

焰ゆる日の旗 酒あたゝめて

まつ我軍に 將軍來る、

馬嘶かず鬱たれ

ザーに誓うて我籠る】

水雷布して舟埋め

砲烟好肴音は美樂

兵器將足り兵は強

浮ぶは鋼鐵巡洋艦

「不知や永久工事の地

祖國の爲めに我が籠る】

攻囲の諸軍引かはこそ

儒子に組みして糧は絶え

ク將邊巡援なく

六月の籠城六月の飢

「蓋世の勇」と歌ひけん

遠き歴史にいやまして

傷丸、病、そもためず

牛馬を屠つて數知らず

君願くは聞けよかし。

薰る膝にも沈まばや。

かくてえたへで末いつか
雲の旗手のよし暫

彩り匂ふ時ありや。

我戀人（同）

白きさ百合みながゆびを
わが唇にたしあてゝ

「我戀人」とわれさけび

脣に凝りたるたもひをば
あつきいぶきに溶さばや。

燃ゆるが如き紅に

咲きたる薔薇のその花を

「我戀人」とわれさけび

わなゝく手もて捧ぐとき

只うたゞねの手枕に
もつるゝ髪の長かもじ
箇にもとけぬ七重八重
輪廻の糸に結ばれて
姿しづなく風薰る
化粧の窓の此夕。

また晴れて行く春雨に

月も朧の薄櫻

影にはのめく紅も

かはる燈籠の繪そらごと

春や昔をしたひては

衣桁に重きなげのきぬ。

伽羅の匂ひも淺香山

反魂香にうつろひし

影さへ見えぬ佛を

忍ぶ文字すり亂れでは

せめて絃にも水調子

「涙は戀の常なれや」

夜鳥

世の苦みに堪えかねて

今日偽の罪知りし

秋

水

梅の梢の鶯を

うきたる夢の曲と聞き

雲の雲雀は賤か女の

淺き心と聞きし我

胸のなやみに堪へかねて
更け行く夜半を暗闇の
呪咀の聲と聞きしき
汝かもたらと知らさりき

あはれやさしき姫小百合
夜半の嵐よつらくとも
迷の國に手びさせよ

ありや無しや

あはれ過ぎにし秋の暮
汝か子別の音に堪へて
泣きし縁の糸ななく
今宵また逢ふ契かや

あはれやさしき姫小百合
夜半の嵐よつらくとも
常津磐根に生い立ちし
岩間に深く根さしつゝ

たわすもだの魔神に
胸の血汐を吸はれつゝ
長くは有らぬ我ながら
汝か叫ひの頼母しき

湧く眞清水の新らしき
生命を受けて朝風に
笑みつ化粧の水鏡
うつる姿のけたかしや

○

いまはの床に花なくも
御僧が教聞かすとも

花は紅、雪は白
水はみとりの緒の糸
かさる手球の我地球

○

不壊の虛空にかゝやきて
愛のきつなに縛られつ
斯くて晝行き夜來り

船唄は蘆の枯葉をそよがしつ夕月寒し春の日野
川
林なす松の香踏みて鄙唄に馬子の手綱の春永き
日や

秋はみ空に月の澄む

及びつきて柴を荷へる乙女子の笑に語るや三里
岨路

智者にはあれし野面なり
老ひには寒きみ山なり

生命なしとよ歌人よ
汚れ果てぬと道の師は

されと霞に花と酔ひ
彼のよき人の胸に生く

月に梢の琴と鳴る

快樂つきさる乙女子は
彼のよき人の胸に生く

花戴せて流しゝ間なく筐舟の沈むに群れし幼子
の愁
立ち騒ぎ逢初川の仇波に漕ぎ來し人の船路知ら
れぬ

浮草の君にそれとは言ひ兼ねて嫉みの波の色を
知れとこそ
手枕の夢よりかへれ池殿は花の流れに浮きぞわ
づらふ

なき

雨かな

七十八

絶りがての水棹に花の亂るゝを霞尋ねん小舟の 三たり四たり桃より出てゝ桃に入る日傘ちいさ
君

とは言へど春の想の深かるに解きなば水に髪長

ひいなにと桃の下道桃の枝ちさきを折りぬ春の
からむ

き京の端れや

何か見る春の燈火淡き夜をゆめに笑みたる人美 影黒うもやへる船に唄もあらす兩の音きく浦の
しき 夜の月 一夜や

細道

栗本瀬平

秋水

破韻集

野は寒う京へ入らむの尼一人數へし路に影遠み そはあまり女々しかりきと歌反古をあはれ裂く
ゆく

度調弱り行く

別れ路のその杯を歌にして君を送りぬ春の夜の もろければ露を涙の花かけに戀か蝴蝶の夢深う
月

して

文笛もぢし被衣の人の訪ひや月たもしろき紅梅 なか〳〵に快樂影さす世ぞつらき嵐よ狂へ星落
の宿

ちんまで

樂堂に樂の音絶ひて一しきり牡丹くづるゝ春の 白梅の歌とは遂にならさうき思ひ出多きその木

かけかな

峯いてゝ大空とびて波に入りぬその白雲に眠り りも見ましや

たりせは

忘れめやつきの恨みの小倉會この振袖のさても
なべて世はみ墓となりぬ雪の夜靈はみ空に神と 長さよ

なりつゝ

強き子とたよりし君に泣かれては我が世の秋の

山美水濃

琴川

涙よく花の生命を延ふや君泡咲く酒の香に歌は 春風一陣桃李の花を吹きはらひ雞の音清し美濃
ふん の山村

かく弱き君と知りなはひとりたゞ懷いて消らん 長良川金華の山を横にして流れぞ清き春の夕暮
恨なりしを

斗牛

きてみむ

千石の船の舳に仁王立ち波吉五郷灘のみや越せ 桃李不破の關屋に咲きいでぬ問へど談らぬ昔き
ぬ

春寒し歌枕見に中納言あられ酒召す南京の宵 君させ伊奈波の櫻続びぬ友のたとづれいざゆ
あたらしや興次郎殿の春の晴衣猿媛んでか背に かまほし
にくれけり

爪痕

文苑

七十九

征露將軍

晴れし間と友音信れて歸る途雪の松か枝月美く
しき

古塚の取りくづされし新畠松の根越よほろゝ打
つばめ

友が廟檐端の蜘蛛の絲に白き胡蝶の翅を月さむ
う照る

波小波みだれみだるゝ春のうしほわたるものな
き月の小兎

をりく集

水衣

春の泉ねたしとみし村はづれあやにくまがふ
君たもふかな

歌よわせめてとひきし弓弦よ三位が橋にまど
ひまとひぬ

こよひ高う海のほどりの鐘樓守罪のをはりとこ
よひ高ううて

笛なれば歸る葦路わすれ人か君はと君のたどり
きまさば

そのほどは水に小琴のひびきすと橋のへつらき
霜月夜かな

春の譜

紫雲

「都よりぞ春はたづらしけふ一瓣」唉けば里への
鶯やさよたる

春の夜を帶の祝や繪蠟燭。
吟む『懷鄉の賦』や春の人。

勾欄にたきし玉露それと知らば其夜の鐘に筆あ
らひ給へ

草餅や華洛に近き妻が里。
路次に入る染糸賣や春の雨。

冬春亂題

外圃

桐火鉢運坐の硯分ちけり

老樂や炬燧の上の嘆異抄

いさゝかの風邪を湯に入る早寝哉
埋火や老の夜わびて山家集

水仙花石鏡の額掲げけり

熊祭すみて淋しき榾火哉

風や月入り方を蝕しけり

雲の月蝕し敢へさる霞哉

風や電燈白き廊町

よわき子の夜學に通ふ懷爐哉

粥施行椀の縁うつ霞かな

梅四本鷄遊ふ社頭哉

浪華高津神社

槍つかふ若侍や春寒し

むくむくと肥れた小犬や春の草。

臘夜を室町御所の管絃かな。

川尻や桃の小村の朝煙。

初午や御徒士小路の童ごら。

馬で行くだんだら葦路や春の風。

春の燭十郎舞ををさめけり。

濱茶屋に蛤鍋や春の雨

樂殿に新譜を合す春の人。

春風や御衣の垂るゝ女輿。

卷藁やそれ矢にこぼる坪の梅

南様や雪の消え行く戸樋の音。

藪蔭の淺き小川や椿散る。

征露將軍

繪馬堂を見晴らし茶屋や梅の花

雜魚場

橋上や覗をこぼす市の雨

畠人に御陵を問ふ野梅哉

鶯や扣へ乳人の宮住ひ

幕間や人を眺むる宵の春

ものゝ日の草餅賣や春の山

行軍や晝餉に上る春の山

酒の醉扶けて下りぬ春の山

行列の大手へかゝる燕哉

沈む日に煙陽炎ふ野燒哉

城の山風なき午をやきにけり

菜の花や風上り居る晝の月

大名の庭の工みや春の雨

岩つゝじ庭の工を盡しけり

海棠や肌にはやかに化粧の灯

白桃や種痘日續く里の坊



城南の桃に市人の遊びけり

幕間や町に出遊ぶ春の人

遠火事の騒きこゆる薄闇哉

山茶花の向ふは京の時雨哉

詩仙堂

雜報

春來れり

春來れり。遠山の雪未だ融けず、古城の石垣に枯藪空しく戦いて去年の夏を忍ばしむるのみなれど、濠邊の竹藪に五位鷺翼を潜め水底に沈める落葉が中に小魚淋しく其鱗を動かせど、ああ春は來れり。

春は唯々自然の景情にのみ現はるゝものならんや。新しき希望を懷いて新しき年を迎ふ、吾人の胸中には既に見れとも見えず、聽けとも聽ねざる春の若草は崩れ、春の小琴は其絃聲を響かせつゝあるに非らずや。

北陸の地勢、由來北海に偏せるの故を以て雪華深く暗雲濃く、時に飛霞玻璃窓を打つあり、急

雨颶然として襲ふあり、春來ると云ふも名のみ、人は唯土壌長く圍める暗室中に潜みつゝあり。

あゝ然れども吾人には春來れり。

由來青年は理想の子なり、活動の兒なり、希望の子なり。今戰勝の新年を迎ふ、胸中自ら欣然として既に幾多希望の畫卷物は開かれつゝあり、然かも其景や皆春に於ての活動に非らざる無し。

あゝ春は來れり。青年よ活動せよ、靈的と肉体的とを問はず、青年は活動の子に非らずや、徒に北陸の險惡なる氣候に敗れしを知らず沈思を名とする逸樂、研究を口實とする安居は吾人青年に於て何するものぞ。

日本民族は世界の活舞臺に出でたり。日本民族中の花形なる青年よ、卿等の理想を徒に眼前の物質にのみ馳する如く狹小なる乎、あゝ春は來れり、活動は是より起らんとす。青年諸子何ぞ醒

めざる

◎演説部大會

(略子)

二月四日の午後二時に開かれ五時半に終りました。た聽衆五十人に満たず國家の大問題が議場に於てよりは寧ろ待合の奥で決めらるてう今日此頃まして町人根性を特色とする我校何んのかんのと言うだけ野暮でしやう。

辯者は十二人皆それぐ爲めになる興味ある御話でした之れから順に其概略と記者の感じを述べますが辯士諸君には充分同情を拂つたつもりです

○當今の經濟政策 本間先生、日露戰爭は北清及朝鮮に於ける日露兩國の「新しき保護政策」の衝突である事を説明的に述べられました

○私立學校の弊風を論じて徵兵制度の停止を主張す 清水君、君は四高の先輩て大學に御出

になる方です本題に入るに先ち演舌部の不振は政教紙上に掲載せられたろうですから畧しまます清水君の熱誠を感謝します、

○國民の戰爭觀に就きて 森岡君、日露戰爭の経過を述べ國民の戰爭觀を四別し其過誤を指摘し日露戰爭は要するに日本を世界的たらしむるに於て大なる意義有りと斷定せられた辯述概して巧に音聲態度も又適度で有らう(態度が氣取つてし、いやたと言う人も有つた)記者は兎に角望を君に囁する、

○時弊と体格 白上君、近時日本人の体格の劣るは西洋文明を凡て丸呑みにして消化せないからで有ると論せられた君は時習寮錚々の辯士其滑稽洒脱の辯は誰れも知る所だ聞いて厭きないだけが取得であらう、

○馬鹿正直(?) 笹井君、近時の人間は直覺的

良心か痴癡してると大に當世才子を罵り彼等は氣骨ある者を呼んで馬鹿正直と言ふが余輩は甘んじて其稱を受けん辯明晰にして簡潔でした、

○佛教史談片 香川君、日本佛教の發達は國家主義に巧に調和したるに由ると論じ各宗の教義と國家主義の關係を述べそれから大變西本願寺の提灯をもたれました説教坊主の様にすらくと平易に巧いものです、

○空想 柳沼君、僕の可能的の空想郷(?)は黃人種帝國であるそなうすれば士農工商政治家宗教家詩人墨客なんでも今迄にないございらしい奴が出來るに相違ないで僕は其廟堂に立つんじや何んと愉快極まるじやありませんかと言う御説壇上水を呑む事一舛むべなる哉此快辯、

○懷疑 赤松君、「朱に交はれば赤くなる」至極御尤もじやが人間が皆自己以上の者と交はら

社会の先覺者となり、人類の指導者となる蓋し是れ文學者の義務、此の如くして始めて彼等が

んとせば人間は交際が出來ぬ筈じやと御都合主義の道徳の爲すなきを述べられました、是より以下の御方は一人僅五分位しかなくつて充分御説を拜聽する事が出來ませんでしたから題だけを掲げて置きます

○王道と霸道 岩本君
○學生と女性 上杉君
○支那に於ける獨逸の勢力 栗林君

○リムボーに於ける宗教と哲學との救濟力を比較し使徒信經及主の新の哲學的解釋に及ぶ 堀田君

(葦霜)

文科三年級の活動

社會百般の人より尊はるゝ故を示すにあらず
や、而して我四高、文科の輕蔑さるゝや久し、

蓋し彼等の中に往々孤獨主義をとり、偏狹に失
し私利に傾き殆度す可からざる輩多かりしと共に

に現代物質的に走れる時代思潮は我が四高生に及ぼし、文科生の懷ける高遠の理想、深奥の哲理、彼等の解する所ならず、徒に外界物質的實利より推し、無爲に衣食する者として蔑視せられしに依る也。

本年の文科三年生、此に激する所あり、小なりと雖も自己の研究せる所、微なりと雖幽遠なる藝術の發展、是等の説を吐き以て我が四高生に向ひ精神的活動の機を與えんとす。其なす所行ふ所小なりと雖も亦壯ならずとせんや。可憐なる所なしとせんや。

一月二十五日午后二時、至誠堂に於て第一回公開演説を開けり。演者左の如くなりき。

布袋主義 藝術の生命 求めて得す **中井宗太郎** 富山智海

近松戯曲と大坂

山崎麓

聽者は僅に四十余人に過ぎざりき、然かも藤井紫影先生の來聽を辱したるは余等の榮とする所、喜びとする所最大なり、蓋し許多の俗衆より一人の有識者を余等は欲すればなり。
あ、頗くは文科生諸子、第四高に於て精神的革命を起さしむるは、卿等の責任にあらずや、いざ他の嘲弄輕蔑を顧る無く超然として自己の理想が指す方に進め。

(冷々)

劍道部報

寒稽古

蕭條たる曉色僅に古城の老樹を抹し、寒鴉凍雀僅に醒めんとす。忽ち聞く無聲堂裡、竹刀の聲

喧々たるを。あゝ我が四高の健兒が其鐵腕を練り其心膽を強うせんとするに熱せる事實や、實に此に現はるゝに非すや。
朔風骨に徹し凍雨肌を切る時や、銀花三尺堂を壓せんとする時や、飛轂暗中に聲ありて道場の板氷の如き時や、健兒の意氣愈壯に、彼等の四肢愈鳴らんとす。

劍道寒稽古皆勤者

石黒文吉 桑名信

堀内潔

關谷吾一

田島亘

瀧谷壽彦

飯盛里安

糸賀庄造

畠野誠一

牧野純一

柳沼廣三

南慎一郎

本間嘉輔

松崎覺淳
猪符恭介
西村造爾
佐藤豐次郎

三級進級者

羽下 昂治郎 星 信 雄
中野 並助 高喬 勝巳

文
吉

真
館

保

横田清三郎 松川十一郎

秀一
四
級

之

玉井利七郎 竹田鋒三郎

五
亘 級

卷之三

郎

以上三十三名

三 義
郎 直

南
歸

雄 郎

遺編者姓名

寒稽古に於て武を練りし諸子、今や大なる榮譽を以て此に進級せり。あゝ諸子よ、將來第四高劍道部の名譽責任は皆諸子の頭上に在り。諸子の多くは蓋し新進の士、勇氣の壯なる前途の有望なる、卿等に如くなし、願くば卿等此に思ふ所あり、本校剣道部の爲めに自重せよ。

高田義直　南慎一郎
泉崎三郎　星信雄
吉野勝六　佐藤勝榮太
田中八百八　白杵善三郎
飯盛里安　卜部正一
藤江林治　糸賀庄造
中倉修五　大脇哲二郎

剣道大會の記

二月十一日、此日や實に佳節、遙に帝都を拜し、神州の紀元始まりて、此に二千余歳、今や人民相歡呼し鼓腹するの喜びをつくすを得、誠に國威は海外に舉り内に太平の樂あり。極りなき皇恩を祝す可きの日なりとす。

此日を下して我劍道館の大會を催ふす、亦意なし
せんや。昨日の降雪猶老杉の葉を蔽ひ無
聲堂の屋根時に雪崩の聲を聞く。然かも曉來灰
雲天を壓し、寒風骨を刺すものあり。正に劍氣
森然として人を襲ひ渾身の霸氣、無聲堂を動搖
せしむるの慨ありて存す。

三本勝負

小手、胸 湧井 廉平

横田清三郎

小手、胴
面(中倉
上野) 修五
貞次

東野異文

朋
朋
中 王
村 十 嶽 平
正 二

雜報

胸(伊藤高木) 脣(大野義親監) 突(關谷昌信警) 小手(清水金春監) 腕(眞館文吉) 三也(專保)

胸(伊藤高木) 嘘彦(監) 突(高村金春監) 小手(石橋眞館) 三也(專保)

突(大野義親監) 引分(高村金春監) 小手(石橋眞館) 三也(專保)

長の敵に對し、一喝して太刀を振ひ踏躍す。あ此小身の人蔑る可からず、見よ先づ美事に小手をとり續いて胴をとりしを。

長卷形

小嶋鬼男

安田儀一

以上の諸氏、皆壯烈勇猛、龍虎騰驤の概あり、或は兩腕鐵石の如く固く竹刀を奮つては獵鷹猛獅を粉碎するの趣あり、血氣にはやる若武者は健闘踴躍して敵を敗らんとし、場所慣れたる老武者は嚴然睥睨して敵の疲勞を待つものゝ如し。周馳叱咤の武者聲無聲堂上の瓦を轟かし、親友の危きに思はず歎聲を發するものゝ同級の人の美事に敵を破りしに思はず拍手するものゝ、一場の活劇は演せられき。

今其數番を列記せむか。

横田一湧井、共に是れ同級の人、横田氏は身稍長大、湧井は小、白肌衣の具足に身を固めて身

病んで竹刀を把らざる事半歳、然かも素養の凡ならざる其切先の敏捷なる、未だ輕す可からざるものあり、羽下は北越の若武者、此技を習ふて未だ深からずと雖長足の進歩人を驚かすものあり、今日の勝敗如何ならんと見てありしに、例に依り敏捷なる大串氏の太刀風、電光の如くに飛び來つて二度までも小手を取り終りぬ。老將の英鋒眞に可怖。

石井一山崎亮。石井氏は身長巨大、骨格の魁偉、一見先づ人を驚かす、山崎氏や小兵なれども柔道の妙技を極め、其名校中に高き勇者、蓋劍道は其余技のみ、然かも凜乎たる態度、其武者聲や既に其技を學ぶの深きを示せり。石井氏亦何

ぞ是に劣らんや見よ絶大の猛虎は絶壑に據つて直に一小狗を粉碎せんとするの慨あるを。

然かも此小狗や意氣勃々巧に猛虎を弄して搏たしめず、場内風雲湧いて颯然たる雷雨來らんと

し太刀空を切つては電光に似たり。忽にして山崎氏の太刀は石井の小手を取り續いて胴を取りぬ。あゝ猛虎を倒せし小狗は今日の露に對する日本か。

栗本一鈴木。共に柔道部の勇士、亦此餘技あり。身長相同じく元氣相比敵す、栗本氏先づ面を得次いて突を得ぬ。

田中一中野。田中氏は是れ新に五級となりし勇士、中野氏は是れ端艇部一部の撰手として又、

健脚敏速一哩競争に雷名を轟かせしの勇士。田

中氏太刀を把るや激突奮鬪、其身長を利し敵の面に向つて打ち下さんとし鎧然として紫電閃く。中野氏は悠々自若、巧に銳き太刀先を避け

つゝ敵の疲勞を待つものゝ如く、忽ち機をや見出しけん發止と打てる太刀先見事に小手を斬り、敵のひるむ所を虹霓の如くに太刀を舞はしてた面一本！天晴見事なりき。

高橋一臼杵。高橋氏は是れ師範校の勇士、臼杵氏は本校新進の勇士、敵に向ふや長大の身をして蹶起し大喝百雷の如くに轟き敵をして壓服せしめむとす、然かも高橋氏亦遠く來つて我と戦はんとする者、手腕に覺ゆ無からんや。彼に獅子の巖石に踞するが如き趣あれば是に雄豹岫を蹴るの慨あり一虛一實、相下らず觀者手に汗せしが臼杵氏遂に利あらず外來者をして空しく名をなさしめぬ。

氏最苦心の處、岡田氏隙や見出しやん見事に胴を取り、勝に乘じ頻に敗らんとす、然かも我亦腕に覺えある勇士なり何ぞ俄に敵をして名を成さしめん。あゝされど記者の側に師範石川先生

あり、敵味方決戦の状を凝視し居られしが此時、撫然として余に私語して云ひ給はく、其れ突き

突きと、あゝ果然敵の突き出す太刀は見事に飯森君の咽喉を貫き終りぬ。正に千秋の遺憾。

赤土一石黒。赤土氏は是れ商業の猛士、石黒は是れ本校の中堅、態度雄偉、石川先生の劍法を學んで勇往直進最先生に似たる所あり。此日外

來の二強敵を引き受け敢て迫らず悠々として場

に登る、赤土氏細身を舞はして防戦最つとむ。

而して此日石黒氏猶後にひかゆる敵の爲めに大に凝りたりけむ、平素に似ぬ切先、遂に敵に勝をゆづりき。

村上一泉崎。大喝一聲颯然として飛燕の如く体

飛虎將軍先づ一躍して敵を招く雄熊將軍慾揚とするを。一は是れ一中に去る者ありと知られたる意氣兩將軍の胸中に湧いて風雲慘憺、無聲堂れる會津武士の流れ、飛虎將軍栗林氏。鬱勃たる雄熊將軍松田氏、一は是れ校中に蠻名轟き渡る意氣兩將軍の胸中に湧いて風雲慘憺、無聲堂中悽清たる殺氣満ち、觀者皆手に汗して満堂水を打ちたる如し。

飛虎將軍先づ一躍して敵を招く雄熊將軍慾揚として相應じ互に機を窺ふ、と見る間に倏忽飛虎將軍激突奮闘して敵を打つ、雄熊將軍、こはものノヽしき敵の舉動やと許り受け流しつゝ、阿修羅の如く荒れ行くを少しも騒がぬ飛虎將軍、時機は宜しとや見たりけん。秋水をとりなをし

て小手を先づ取り、流石の雄熊將軍も深手の痛みに惱む處を又も寄せ返る太刀先に憐れや敵は討たれけり。

赤尾一谷中。黒糸威の甲冑嚴めしく出陣せしは是ぞ新進の若武者、やがて劍把る手に鐵筆持ちて宇宙の深遠なる眞理を見出さんとする青年哲學者、谷中氏なりけり。文科は由來柔弱の名高きを、いでや一合戦して敵の者共を蹴散らし文科中猶此豪傑あるを知らしめんと勇しくも亦優しき舉動を、相手も名にし合ふ、専門校の赤尾氏、天晴の敵や太刀を合せて恥かしからずと打出で虚々實々互に相挑み、右を打てば左に拂ひ、左を打てば右に流し暫時は勝負も見えざりしが、赤尾氏の銳き太刀先、あはやと見る間に谷中氏は胴を切られたり。流る血潮を拭いも

敢えず無念やと許り前にも勝る太刀風に美事彼方の胴を切り返し獅子奮迅の勢もて相競ひしが

飯山一佐藤。兩將軍場に在り。的歴たる紫電何處ともなく閃き、掩映顯晦する暗雲颯然として場を壓せんとす、一は是れ二中の総大將、いで四高軍を皆殺しになし呉れんすと、四邊を屹ど

睨んだる威風は鬼神も怖れん許りなり。是れに

が如く、満場爲めに醉へるが如し。

向はん味方の大將は誰。是れぞ之れ嘗つては尋中に雷名を轟かし莫姿堂々、戟を執つて兵を按するや、陣雲自ら下つて此將軍を守衛するもの如き者、實に校中の燕人張飛佐藤將軍なり。

佐藤將軍や既に戰膽鐵血、身を鉛銷にさらす事數年、雄心落々として敵を見るに際し目皆皆裂け怒髮逆に立ち、龍虎亦影を潜めんとす。今や此好敵手なる兩將軍相對して場に上る。満場寂然として凝視す亦宜なりと云ふ可し。

飯山將軍、鐵甲を鳴らし劍を揮うて來り迎ふや

佐藤將軍意深く決する者の如く猛然として戟を振つて立つ。双龍天上にて相撲つ如く沛然たる急雨來襲せんとするが如し。彼に鶴翼を披くの兵法あれは是に魚鱗を布くの兵術あり旗鼓亂れんとして亂れず、胸壁崩れんとして崩れず。突騎時に敵の中軍を襲ふ如く急箭時に驕虜を射る

業、如何成り行くらんと思ふうち、かくては勝敗定め難しこや互に禮をなしてぞ引き別れる。

笹川一赤松。笹川氏は是れ師範校の總大將、先きに老將福島氏を破りたる山陰の若武者を斬つたり。此方は赤松氏殊勝なる敵の舉動や、是も

者容易に屈せず一上一下孰れ劣らぬ手練の早業、如何成り行くらんと思ふうち、かくては勝敗定め難しこや互に禮をなしてぞ引き別れる。 笹川一赤松。 笹川氏は是れ師範校の總大將、先きに老將福島氏を破りたる山陰の若武者を斬つたり。此方は赤松氏殊勝なる敵の舉動や、是も

て捨てばやど意氣自ら昂りて場の一隅にひかへたり。此方は赤松氏殊勝なる敵の舉動や、是も

軍神の血祭りになし與れんと戰勝の餘威に乘じたりき。

軍神の血祭りになし與れんと戰勝の餘威に乘じたりき。

て奮然と立ち迎ふ。戰塵起り劍光閃き軍聲合し陣色揚り叱咤の聲劍戟の聲場の冷板を破り碎かん許りなり、流石に師範校の總大將が鋭き切先に、赤松氏胸を取られ、怒髮逆立し憤然として太刀とり直し得意なる胸に敵の勇士を見事摧きたりき。

矢原一佐藤。矢原氏は是れ専門校の勇將、我が四高中の中にも其名高き佐藤將軍が此日の勝利、

して防ぐに難き太刀先を佐藤將軍は柳糸が春風に弄さるゝ飄々として受け留めつゝ、時分は好しこ切り付くれば二度迄續く小手の妙技！敵は空しく引きあげぬ。

石川先生余の傍に在り評し給はく、佐藤は前は態度嚴重、威儀堂々今は輕妙敏捷、最面白しと。

佐藤將軍の面目や宣く現はれしと云ふ可し。あゝ好將軍健在なれ。

布目一田島。布目氏は一中有數の強者、田島はいて我が専門校の武威を輝かさんと陣勢を分ち車塵を起して待ち構えたり。彼方は例の佐藤將軍、悪き迄落ち付きたる態にて、金甲錦袍に身を裝ひ旗鼓堂々として馳せ向ふ。矢原將軍が怒つて突撃する太刀先を日頃は蠻力比倫なき佐藤太刀先を示す、げに將軍が千化萬變の兵法こそ怖しくも測り難けれ。猶も矢原將軍が奮鬪蹶起

本校新進の若武者、風貌を見れば優雅溫順、太刀を把る方さへ無きに似たり。然かも一度戰場に出づるや、勇往直進、其技の敏捷なる電火の如くして青潭の小魚猶免るゝの途なからん。田島氏先づ美事なる胸を取る、敵大に憤り優しき若武者に勝はゆづらじとは再び胸を取り、寄せては返し返しては寄せ、烟塵の色、銃砲の聲轟々然たる許りなりしが、田島氏が例の矯捷な

る太刀先、發止と音して打つたるは、是ぞげに
美事なる面一本！

石橋一眞館。本校新に若將軍を迎ふ。搏龍擒虎
の手腕金鐵の如く、刀戟を横へて白眼敵陣を睥睨すれば敵自ら退き、精騎を提げて胡塵に向へば塵自ら天際に漠々として飛散す。此將軍若うして鞍に據り威風三軍を壓し其名、隆々として聞ゆ。今や幸にして此將軍を迎ふ本校の急先鋒と成すを得、吾人の喜何に若かんや。あゝ君一人あり、數万の胡虜戎馬の來り襲ふも何の怖る事か之れあらん。

此若將軍を誰とかなす曰く眞館保其人也。此日専門校の總大將石橋氏と戟を交ひしか時に利あらず空しく敵をして名を成さしむ。然かも勝敗は兵家の常のみ何ぞ深く問はんや、唯願くば、爾來愈々勵其武を練りて本校劍道部の爲めに盡されよ。是れ余の一私言ならんや。

今や老將軍相敬禮して立つ、燦爛たる兩つの日

月、紛々たる群星中を抜け出で、相鬪ふ如く煥炳凜烈、正視す可からず、場内默然として醉へるが如し。唯刀戟相觸るゝ音を聞くのみ。既にして忽ち聞く、百雷の如き關谷將軍の聲、曰く突いた！

果然！大野將軍は頭を天に向け空しく劍を提げて立てり。場内俄に靜かなる動搖歡呼の聲あり。蓋し自ら禁する能はずして出でしもの、必しも遠來の客に對し禮なしと責む可けんや。

大野將軍今や此奇兵に逢ふて大に捍禦す、然かもあゝ遂に關谷將軍の神出鬼沒の妙技に逢ふて施す可きの術なく空しく恨をのんて退きぬ。

かくして本校の總大將は勝つて驕る色なく肅然

として場を出でぬ、あゝ勝つて愈禮あり、人誰

か此將軍に賞讃の聲を惜むものぞ。かくて此數十回の番組終り小島氏及安田儀一氏の長巻形あり。

青木先生を迎ふ
吉村先生の我校を去らるゝや生徒は一同首を仰

いて後任の先生を待つこと恰も旱天の雲霓を望む如くなりき

大野一關谷。大野將軍は監獄部内に聞いたる老將、從來幾多の俊英を倒し老いて愈壯、猶手に長鯨を掣するの概あり。然かも此老將軍に對し、細き竹刀を把り凜然として場に出づるや場内ら動搖し喝采禁する能はざる物あり。是れを誰とか成す、實に本校の總大將、關谷將軍其人。漆黒の長鬚胸に垂れ、殷勤なる其態度、自ら人をして畏敬せしむ。此將軍一度陣頭に立つや、疾き事風の如く徐かなる事林の如く、一度劍を以て招けば兵氣肅然として崛起し、一度戟を以て制すれば旌旗倏然として掩映す。然かも其兵暑の千變万化するに至りてや或は掠亂して飛霰の如く或は飄颻として柳絮の如く敵陣を蹂躪する事平野を行く如く三軍を守護する事山嶽の如きものありて存す。

柔道部報

松川一香川 戰ふ事一合忽ち返す帆柱倒し續き

て大内股に勝を占めにこと笑みしは香川君獨

得の愛矯

木田一三邊 木田君防戦 よく勤めしと場數に馴

れぬ悲しさに空しく勝を譲りけり

浮田一矢柴 共に筋肉逞しく新進の好戦士左に

驅け右に蹴り勝敗何時決すべくとも見に分かず

荒見一舌屋 互に屈せず善く戦ひしが荒見君力

や勝りけん巻込に一本を占む

辻一青木 辻君小兵と雖も名ある早業脇力勝り

し好敵に立ち向ひ普通の事ではかなはじと我身

を捨てゝ勝を得ぬ

波多野一西村 波多野君立ち上り懸巴投にて一

本を得しも西村君もさる者少しも恐れず進みよ

り見事足掃に掃ひ除けしが續きて來る敵の巴を

避けつゝありし隙に端なくも背負はれて無念の

歎がみ

護一吉野 護君得意の背負投に効を奏せしが吉

本

波多野君立ち上り懸巴投にて一

本を得しも西村君もさる者少しも恐れず進みよ

り見事足掃に掃ひ除けしが續きて來る敵の巴を

避けつゝありし隙に端なくも背負はれて無念の

歎がみ

米澤一河合 河合君の熱心と脇力とは近來著し

せよ

山崎一中野 互に秘術を尽して戰ふ事約十分軍

配を上ぐるに由なく今は是迄よし見ゆける刹那

午砲の響と相應して壘を擄つ者あり奇麗も奇麗

者いつかな動かす遂に攻めあぐんでぞ見ゆけ

る

赤松一朴澤 赤松君驅幹矮少なりと雖も名ある

劍道の達人柔道亦人後に落ちず得意の掛聲諸共

に一舉に敵を屈せんと挑みかゝりしも敵もさる

者いつかな動かす遂に攻めあぐんでぞ見ゆけ

る

山崎一中野 互に秘術を尽して戰ふ事約十分軍

配を上ぐるに由なく今は是迄よし見ゆける刹那

午砲の響と相應して壘を擄つ者あり奇麗も奇麗

者いつかな動かす遂に攻めあぐんでぞ見ゆけ

る

山崎君如何なる隙をや見出しけん飛鳥の如く附

け入りて肩に背負ひし其早業鬼神も舌を巻きに

ける

竹田一森岡 森岡君よく戰ひしも天君に幸せず

悲しいかな聞く所によれば爾來致々技を勵み捲

土重來會稽の恥を雪がん事を期すと其意氣や壯

なり希くは中途に挫折することなけれ竹田君の

首投いやはや恐れ入つたる妙技感服々々

解散しぬ

午後一時の號鐘高く響くや瞬く隙に無聲堂は再び人の山を築きぬ

是に於て部員の熱心効果を結び技進み精神の修養見るべき者を撰びて進級は行はれぬ名譽の撰に與りしは誰々ぞ（證書授與順）

小泉禎次

右二級に昇進す

中村正

原恭造

猪狩恭介

八田興一

加藤完治

矢口長三

波多野友二郎

西村慥爾

栗本快一

大和田信吉

朴澤三二

小川重雄

倉内松藏

山崎亮五郎

長田勝芳

大和田信吉

飯田直二郎

木村法惠

若井孝太郎

米澤末治

久保護躬

白上佑吉

中村正

中野並助

品川主計

宮長平作

長屋脩

栗本快一

柳沼廣三

鈴木三郎

柳沼廣三

渡邊龍

右三級に昇進す

久保護躬

白上佑吉

高橋克己

竹田鋒二郎

品川主計

宮長平作

長屋脩

栗本快一

柳沼廣三

鈴木三郎

柳沼廣三

山崎喜登一

次で寒稽古皆勳名譽賞牌を授與せらる其榮を擔ひし者左に（イロハ順）

田崎挂一郎 河津仁
山内喜之助 森田三郎
菅原健松 久田一雄
後藤多喜藏

右四級に昇進す

田崎挂一郎 河津仁
山内喜之助 森田三郎
久田一雄

古屋五郎 福間賛吉 谷中一見間 見聞君懲々として押込に一本を占
後藤多喜藏 青木精一 む谷中君怒つて打ち懸かる所を亦もや身を翻し
赤松祐之 木田芳三郎 鈴木一高橋 共に聞こゆる腕力家今日こそはと
三邊長治 品川主計 鈴木一高橋 共に聞こゆる腕力家今日こそはと
塩川正藏 白上佑吉 金剛力を腹の底より出せる事とてさうなくは勝
關谷吾一 鈴木三郎 を譲らず鈴木君がいらつて競ひ進みし大外薙危
鈴木寛一 機一髪高橋君の計は成りぬ時ならぬ大外薙は返すに多く勞を費さじ

小和田一奥田 兩勇士悠々然として出陣し再び脩羅の巷は開かれぬ共に十有七貫に餘る鐵腕銅足手に汗握りて勝敗如何にと見てある所に小和田君新進なれ共名ある手利なれば奥田君の息巻き切りて寄せ来る業を物々しやと右に外し左に抜け足掃を掛くるよと見せてひらりと身を翻し掛けたる得意の巴投に流石の奥田君も堪り兼ねしも騒がず新進氣鋭の戸田氏に向ひよく戦ひしも烈風の如き足掃一本防ぐに由なかりしか無念敵の生首抜きし早業に一座一時にぞよめきぬ

城谷一松岡 松岡君新進にして血氣の猛り男社合に出づるは今日が初陣なれ共對外勝負先鋒の任汚さじと滿身の勇を鼓し火花を散らして戦ひしが敵もさる者右に交はし左に避け勝負決する様も見えざりしが斯くては果てじとニーヤの掛

聲諸共に進み入りし腰投見事に効を奏し面白を

施しぬ

小川一福間 小川君は足掃の名人福間君は巴投を以て鳴る互に五分の弱みあり今日の勝負の花と目指されぬ苦戦奮闘多く時を費せしが福間君の用ひし大外刃全く敵の意表に出で鮮かに月桂冠を戴きぬ

正力一石井 其戦ふや怪巖怒濤相搏つに似たり遂に一本勝負に移りじも勝敗決せず又の日を約して袂を別ちぬ

若井一藤崎 共に之れ幕下の粹風雲を叱咤し来るや甲越兩軍の争ふに似たり若井君の浮腰實に間一髪勝敗の數は定まりぬ

鈴木一後藤 共に新進の四級海老茶の帶に身を

固め悠然として立ち出でしは心地よくぞ覺えけ

る鈴木君新來の氣鋭當るべからず後藤君よく戰

ひしも足掃に不覺を取り續きて來れる横掛に敢

久田一白上 前者を孔明とすれば後者は仲達共

に孫吳を誦んせる稀代の業師白上君得意の左腰

先づ効を奏し怒りて進みし久田君の体落亦的を

外れず觀者手に汗し目を白黒にす一本勝負に入

りてより兩人の氣合ひ益猛にいつ決すべくとも

見えざりしが白上君の大外刃巧に勝を制しぬ兩

君とも終始一貫弧重奮闘少しの隙間もあらせぬ

戰ひしは誠に稀に見る所此の点に於て既に吾人

なく梅花は散されぬ
宮長一柳沼 热心勉勵技藝體格何れ劣らぬ好一對よくも似合ひし兩將かなど吾れ人共に信せしに此の日宮長君如何なる惡魔にみいられたるか

柳沼君如何なる天使の援助を得てか物も見事の釣込腰二本迄も續けて成功しぬ勝ちて甲の緒を占むるは古來武士の守れる金言希くは此れに誇らず傲らず益々勉強し給へかしさるにしても見事の釣込腰やな

は讀辭を呈するに客ならざるなり

行事一小林 行事君は二中に名にし負ふ大の男

孤松大空に嘯く如く猿臂を延ばして引き寄する

をこなたも劣らず渡り合ひ一上一下虚々實々一

歩も去らず戦ひしがいらっしゃ掛けたる大外刃を

無念や敢なく返されてうぬ許せぬと金剛力に隙を得たりと掃ひし鉄脚何かは以てたまるへき頭

顛倒と嵐に木の葉の散る如く斯くてよりして兩勇士は互に睨み合へりしも遂に自衛の体に移り

合ひ引きにぞ別れける

× × × ×

は鴻毛よりも軽く飛び忽ち敵をば組み敷きて喉笛ぎふと占め付けぬ扱は儒子も興みし易しと勝に乗りたる勢に亦もや懶々押込み

小出一吉澤 吉澤氏熱心の効現はれて近來技著しく進む今日こそは晴れの試金石と觀者の望を囁せしや大なりしが豫定は露程も違はず嘗ては郡山の中學に斯界の牛耳を執り今は醫專に此の人ありと知られたる小出氏を大外刃に足掃續け様に投げ附けし奇麗さ

吉崎一山崎 山崎氏近來多く無聲堂を窺はず斯道の爲に憂ふる所然も氏は滔々たる勇士の中に

十分間の休憩を経て講道館柔道投の形は青木先生と栗本君とによりて演せられぬ左右三十本ありとあらゆる業を尽して投げつきの妙技一方は教師なり一方は三級の壘を乗り取りし好勇士吾人は多く賛せず

布村一久保 久保君小兵と云ふ條絶世の早業身

宮川一品川 宮川氏二中に手取の評あり品川長身にして足掃をよくす正に宮川氏と伯仲の間に

あり縦横突撃左に掃ひ右に蹴る勢は目も眩ゆき
計りなりしが宮川氏流石は幼年組より仕上げし
丈に容易に倒れず勝負を他日に譲りぬ
中出一大和田 共に小兵癡猛の逸り雄大和田君
得意の体落しは例により一本を占めしも中出君
が折れよとばかりに取りたる手の逆に無念や忽
ち復讐され一本勝負となりぬ中出君の勇猛も先
程の苦戦に身体綿の如く横掛けに掛けられて敢
なく討死しぬ

野村一倉内 何れ劣らぬ力量躰格共に三級の好
勇士兩虎山に鬪ひ二鷲肉を争ふに異ならず久し
く勝負決せざりしが倉内君がヤツトばかりに掛
けたる巴投に戛然として疊に聲あり流石に猛き
野村氏も隙を狙はれかはさん間もなく盡させぬ
恨を飲みにける

高井一内本 内本氏は一中に旭將軍の名あり高

井氏亦醫專の驍將此の勝負こそ今日の見物なれ
み未だ勝敗決せずかくてある程に栗本君敵の捲
き込みを利用して手の逆に一本を占む森氏無念
と重ねて巻きしが之に効を奏し一本勝負となり
次で組打ともりしが遂に南風競はず栗本君倒る
澤野一木村 吉田一飯田 木村氏飯田氏と共に
京都の出身にして我校新進中拔群の名將先きに
二中に出陣し敵の二將を心行く計りに投げ飛ば
し拔擢せられて一躍三級に列せられし好勇士此
日前者は一中錚々の澤野氏後者は醫專超絶の勇

將吉田氏と戰ふ事となりぬ實に其榮譽也大なり
と謂ひつべし戰時に利あらず共に屍を沙場に曝
せしと雖も一時の勝敗の如きは素より深く意と
するに足らず

記せよ兩勇士 君等は近き將來に於て東西の大

關を占め四高に活躍すへき運命と斯道隆替のよ

りて關する鍵鑰どを有す名譽の大なると共に責

任の大なるべきは多く言を要せざる所希くは深

く胸中に期する所あれ

山田一長屋 四高に驍麟兒あり長屋と號す此日

病後の疲れ未だ全く快復せず敵は名にし負ふ一

ふむ然も敵と相對するに及ひてや慄然自若勝算

既に成れる者の如し忽ち見る雷光石火得意の小

内刃に先敵の荒膽を取りひしき續きて附け入り
し浮腰に流石の敵将も堪まらず乘ね冲をひらりと

一回轉長屋君眞に驍麟兒の名にそむかざるなり
し

今日の天晴れの早業後の世までの語り草にせん

かな愉快なる君よ益々活潑自在の手腕を養ひ給
はゞ獨り君の幸のみに止まらず亦以て北辰校の

慶たらん吾人は君に囁きする所の者極めて大な

り

辻一中村 今や大將の出陣となりぬれば四高の

豪傑中村正氏体量二十余貫仁王も三舍を避くべ

き骨格凜乎たる風采悠々たる態度にて出陣す向

ふは誰れぞ一中に此人ありと知られたる辻豊一

氏中村君は鷦鷯の雀を窺ふ如く辻君は狼の牛馬

を狙ふにさも似たり

少時の程は機を窺ひ瀧を持して鬪はず互に睨み

合ひたる其有様無聲堂の語源なる死中活あり静

中動あり此時無聲有聲に勝つと古人の詠しけん

はこゝの事をと覺ゆける

龍驤虎騰の大活劇は如何に演せらるゝぞと双手
に汗して見てある所に敵に取りては不足なし

でや一撃に打ち取りて功にせんとツト寄り様滿身の力を腰に集め中村君兼ねて得意の跳腰一本あはや運命は定まりぬと思ひきや流石は辻君防禦固くして効を奏せず再び猛りし跳腰に分を收めしか辻君も老功の士正々堂々防戦よく勉め面も振らず命も惜まず力を盡くし術を竭して遂に黑白を別つに到らず戦ひこゝに終を告げぬ時四時を過ぐる事五十分

○品川主計
久保護躬

○飯田直二郎
木村法惠

○○栗本快一
×長屋脩

○加藤完治
大和田信吉

○○木村法惠
右第二中學校へ

○小川重雄
山崎亮五郎

○吉澤鎌太郎
○倉内松藏

戰士は互に禮儀あり場内は終始嚴肅近來否恐らくは未曾有の好況を以て爰に演武は終りぬいざや煎餅を齧じり濫菴を啜りて胸の底を寬ろげんとて愉快なる茶話は開かれぬ君子の交りは淡きこと水の如し今迄は互に敵味方と引き別れ鎬を削りて輪扇を争ひし者も一度戦ひ終りて後は快談雜話賛嘆たる黒雲忽ち霽れて一輪の明月蒼穹を軌るが如し

漫語

ぐみき

○泥酔したる大石良雄を熱罵したる喜剣更に激して一刀の下に彼を斬り捨てしこせば大石の人格如何、吾人は讀物に於ける大石の苦肉の計に感歎かざるとともに又彼が一世の幸運兒たるを思はずんばあらざる也、假に喜剣の刃の下に伏し大石を冥想する時同時に彼の大野某の反つて大石より人格の大なりしやを疑はずんばあらず、吾人は彼の千古の名言なる相を覆て名始て定まるの語のこゝに於て尙完全にあらざるを覺ゆる也。

あゝ境遇と機會とより脱してあらはれたる偉人なる者そも世に幾人かある

○甲論乙駄口角泡を飛ばし席をたゝいて未だ決

せず忽甲呼んで曰く我を呼んで馬とするも可我を呼んで牛とするも可と而して乙は遂に口をつ

筆を擱くに臨みて本校撰手として他校へ出陣せし勇士の姓名を記さん、(出場順)

○は勝×は分

○品川主計
菅原健松

○飯田直二郎
木村法惠

○○栗本快一
×長屋脩

○加藤完治
大和田信吉

○○木村法惠
右第一中學校へ

○小川重雄
山崎亮五郎

○吉澤鎌太郎
○倉内松藏

○福間賭吉
×西成伍

○加藤完治
菅原健松

○小川重雄
山崎亮五郎

○吉澤鎌太郎
木村法惠

○福間賭吉
×西成伍

○加藤完治
大和田信吉

○福間賭吉
×西成伍

○加藤完治
菅原健松

○福間賭吉
×西成伍

○加藤完治
大和田信吉

○福間賭吉
×西成伍

○加藤完治
菅原健松

○宗教心なき詩人の聲は畢竟大なるを得ざるべしとは宗教に心を有する者が詩人に對する要求也、而して彼等が意味する宗教は佛教にあらずんば必ず基督教、基督教にあらずんば佛教、二者の中の一のみ、釋迦や基督や自ら工夫し自ら悟りしものにあらずや、若しそれ徒に大乗經や聖書を研究して古人の跡を尋ねんよりは自ら進で釋迦たり基督教たるに若かず、而して汝が胸底にひそむあるものをして自覺せしめよ、これ吾人が詩人に對しての要求也

○「主よ我を罰する者遂にあるなし」姦婦をしてかゝる奇怪なる言を發せしを思ふ毎に切歎せざらんとするも能はざる也、噫當代尙一人ありてこれを罰する者あらざりしか、而れども更に省る時吾人はそこに尙一縷の光明を認む、何ぞや、自ら罰することの其職に非ざるを覺り彼等の潔く退きしことは是なり、今これを今人に見る、昨

日は罪惡の人今日は法の人、かくて自の罪は他によりて責められ他の罪は自らこを責め而して恬として耻色無し、論者云ふこれ制裁也又曰くこれ進化の道也、昨日は極惡の大罪人にして今日は頓悟の法官たらば吾人何をか云はん、然れども自ら禁漁場に釣して他の網するを叱するに至ては將に三歎の極、

○満足を知らすんば不幸なりとは千古の名言也、然り凡そ幸福の人たらんとせば須く満足を知らざる可からず、あらゆる罪惡はこの覺悟無きに因す、満足なる哉満足なる哉、然れども吾人は目睹する光明に接せずして満足せよと云ふのみ、泥中に生活するも足れり糞上に坐するも足れりとせば畢竟腰抜のみ、若し徒に足れりと云ふを以て名號とせば子何ぞ春秋のうらみあらんや釋迦基督何ぞ天下に呼號する妻を見んや

○毀譽褒貶は汝に任す底の豪傑よたまには影へまわつていかに汝を噂するかを傾聽せよ得るところ更に大なるものあるべし

○深き根底ありてにはあらざるも我是世の牧師なる者の金線の眼鏡を鼻頭にふらさげたるを見る時一種の感念にうたるゝを常とす、敢て憎悪の如きにあらざる也、彼等は慈善を以て標榜とすればなるべし、私は彼等を見るとき何が故に其高價なる眼鏡を賣りて貧民を賑はさざりやをあやしむ

○我が雑誌部の振はざるとともに演説部の振はざる亦久しい哉、大會と云ふにすら出席者僅々五十人みたざるに非ずや、而して更に奇怪なる現象は出演者が其聽衆の少なきを罵り巧に慷慨したるに反し次會のとき其出演者の會場に影

をあらはさくる如き之なり、ふとん雑誌かと人の面前に冷笑し私かにかゝる雑誌に其玉稿とや

○斗柄一轉、新陽景々として明治三十八年の新

野人語

天地茲に従れり。然而吾は舊阿蒙、我が破釜依然たり。嗟呼、吾聊も革新する所なきに吾も亦「新歲來矣」と呼ぶ。世に馬鹿の骨頂とは、かゝる者をや謂ふならむ。馬鹿は馬鹿なりの理屈を吐くとかや、いざや新春劈頭、禿筆を驅り我が

一流の駄法螺を陳して以て、我が初聲とせむ。

○吾人は、奮闘を以て吾人の天職と知れ。然して降魔、斬馬の劍を把つて以て、地上の平和を

唄ひ、人の肉を啖ひ、人の血を啜る惡魔を寸斷して「永久の勝利」に快乎を唱ふべし。

○自己を擴張せよ。自己擴張とは、人間活動の舞臺をして世界的のものとするを謂ふ也。然り吾

人は、壺中の小天地に蠢動して能事終焉と呼ぶの至愚なることを知る。「某は男で御座る」と天下に誇稱する者は、宜しく戰場に於ける英雄、活舞臺に於ける花役者を以て自任すべきなり。

茲に於てか、わから命と特む利刃の要求を叫ばざ

る可からず。利刃とは何? 曰はく、確乎たる己が天職の自覺と偉大なる意志これなり。

○「創世紀」に現れたる毒蛇よりも「默示錄」に書れたる淫婦よりも猶恐しく、僞多きは、人類の社會に非らずや。然りと雖匙を擲つて其が救濟の道なしと云ふ勿れ。又世人は皆鷦鷯狗盜の輩のみなりと云ふをやめよ。卿等識らずや、吾人の改革は關接に社會の革新を意味することを、

○貪狼、執拗、陰險、奸謗等の惡德を粉碎するには、德育と音樂との力を藉らざるべからず。正しき風姿、良き品性、美しき性情、清き理性

は、實に其の賜物なり。

○辛き世の風波に揉れて、永く大氣に觸るれば如く、悄然とし僅に談笑するもの多く是れ三年級の諸子なり。然かも彼等が一年級の時に於て直射に溶れ流れつ、少しの蹉趺、壓迫に瓦碎すや放歌高吟、現今の一年級に劣らざりしなり。

ある類の人を指して吾は、飴細工的人物と謂ふ。

内虛空、外膨大、之を吹くや浮々焉として空を飛びまごふが、之を叩や、潰々乎として粉散して泥に委す。所謂是、玉と散るの類が呵々。斯かる人を吾は、稱して石鹼玉的人物と謂ふ也。

(紫雲生)

冷語

○試に本校の門前に立ちて登校の學生を見よ。外套を被れるあり、下駄をはけるあり、長短肥瘠相同じからずと雖彼等の顏色や彼の形容や、蒼白枯槁、悄然として意氣なく活氣なく、希望ある可き朝に於て樂しかる可き學校に來りし時、に於て、あゝ何ぞ彼等の揚々たらざるや、何ぞ欣々たらざるや。而して是れ誰の罪ぞ。

○試に教室を見せよ、欣然として暖爐の邊に群集し、校歌を唱し寮歌を歌ふは多く是れ一年級の諸子なり、室の一隅にひそみ辭書を手にし、

筆記帳を開き、休時間に於てすら寸陰を惜むが如く、悄然とし僅に談笑するもの多く是れ三年級の諸子なり。然かも彼等が一年級の時に於て憐む可きものあり、會衆僅に三四十人を上らず殊に演説部の如きは茶菓を饗すと稱して會衆を集めんとし亦失敗せり。あゝ然らば此時間に於て我校生は何をなしつゝありや、彼等の中或は郊外に散步せるもある可し、免れ難き用事ある

もある可し然かも六百の健兒の存在せる我校にして此の如き現象あるは何ぞ、我校生は眞面目に他の講演を聽いて益するを欲せざるか、辯論

を練習する必用なしとするか。

○否然らざるなり。彼等は其れ以上に悟れるなり。彼等は演説に耳傾くる時間を以て一週間の獨逸語の下調べをなすを以て利ありとせるなり、一ヶ月前の數學を復習するが遙に怜俐なる手段とせるなり。彼等は青年にあらずや。活氣を欲せざらんや、辯論を好まざらんや、氣燐を吐くを欲せざらんや、然かも彼等はそれをなす時間を有せざるなり、日々の課業に逐はれつゝあるなり。是れ果して誰の罪ぞ。

○金澤は天候險惡。運動に適せずと稱す、然かも運動は近來無聲堂裡に於て數十の健兒が武藝を勵むを見る、稍喜ぶ可し。而して我校生の精神的活動は如何、彼等は靜思しつゝありや、偉大なる理想を養ひつつありや、自覺を持ちりや。吾人は宗教の害を説く先輩の語を聞けり、然かも宗教に代つて精神上の修養たる可き方法を用

されしを聞かず、近來墮落の頻出する亦此に原因せずや。若い青年は一方に偏せんとする傾向を有す、然かも肉体に於ても精神に於ても活動の機を多く得ざる我校生は憐む可きかな、あゝ而して是れ誰の罪ぞや。（暉子）

前號歌壇短評

其一

水衣

斗牛子の歌

暮れてゆく秋の行方や夕榮の雲散りゆきて流聲なき

遊子流にたゞすむこと多時折しもゑなき水に響いて出た句であらう淋しい歌だ子の作中佳なるもの

宴はて、燭仄暗し高殿の朱欄に白う木屋の花

考へて見るとゆかしい様であるがさ程に印象を

與へない高殿の朱欄もあたら燭仄暗しで木屋の

「起ちて舞ひて」などゝは窮した句だ

ま、か子の歌

夢多き身の安からぬ秋の夜やこゝ京を北二百

里の我

先づ無難の作とすべきである

秋寂し夜蜘蛛の絲にくゝられて我影壁に日々

細りゆく

讀辭を呈することの反て此歌をげがすを恐る、

それ美なる而して今やこの艶なるもの美なるものに落ちんとす蓋し想ふべし詩神の微笑！

が惜しい哉胃頭の一句で全然滅茶だ舞ひつゝも

奏で給ふ君が抑も亦全く別人として見んに君と

云ふ語は舞てなる語より見ると是非對照のもの

を直ちに指さねばならないから舞ふ主は自分で

なければならぬ自分であるとすると舞なる語がさつぱり判らなくなつて仕舞ふ察するに作者

の意は佳人を二人うつさうとしたのであらうが

何と云ふやさしい人でしよう女の子の様です

若うして胸に幾重と結ばる、帶もぞ彩を千草
好める

とうく、女子になつた

涙より才に負ふ名の筆にやみてまた此秋を瘦
せて過さんとす

清楚とも云ふべきでもあらうか佳人才子薄命也

矣！

思そぞろそと追ひ見れば誰か子二人秋の夜姿

いと寒げなり

敢て問ふ下駄の響衣すれの音忍び聲さて何人だ

らうと追て見て始めて二人と云ふのを發見した

のか將た二人と云ふを豫め知り更に心にくしと

あとを追てそこで夜姿のいと寒げなるを見出し

たのか

栗本瀬平子の歌
青葉ひたす森の樹かげのこもり沼藻の花白う
波のこまかき

近來新派とさへ云へば自分にも説明せられな
い無理な句を殊更に用るれば穿ち得たものだ

と云ふ傾があるのは（殊に局外者が春りにこ
んなことを云ふ）大に慎むべきことであると
思ふ勿論前號にはあまりなかつた様ではある
が（妄評多罪）

○斗牛君

其二 風草

「君の作」凡て二十有六首中僕の氣に入たのは次
の四首である。

（一）暮れて行く秋の行衛や夕榮の雲散りゆき
て流聲なき

（二）再は逢はん逢はしの三年の今日眞萩かつ
散る風の淋しさ

（三）その涙その一聲を春を見てなど秋に憐む
翅と知らぬ

（四）さはれ見よ幸あるものも幸なきも野末の

その他まだ有るか一々指摘する必要を認めない

草に光なき星

此等とても隨分非難す可き点はある現に（一）の
如き一首の中に「行」と云ふ詞が三ツ迄用られて
いる他に代る可き詞はいくらも有るだらふと思
ふ又（二）の如きも「三年の今日」とは餘り面白く
ない言ひ方だ然り君の二十六首中では此の歌が
先づ一番想かよからふ以上四首以外の君の作は
或は口調が悪く或は無理な詞が有つたりして僕
は感心出来ぬ例へは以下の數首の如き最も僕の
取らぬ歌だ

（一）紅に染みし血潮の劍横さまに振れは秋風
迷ふシベリヤの原

（二）うらふれて巷に捨てし破扇眼につらし此
世の雲

（三）宴果てゝ燭ほの暗し高殿の朱欄に白ふ木
扉の花

聖絶である靈妙である子にして始て此の歌あり
であらうま、か子の「秋寂し」の歌をのぞいたら
これを第一位とすべきで三誦自ら仙化せらるゝ
佳なるもの
星に誦す哀詩の吟の音に通ふ葉摺やさしき森
の調べよ

大原女の姿やさしき色たすき夏菊のせて加茂
の朝ゆく

詩味素然たりではあるが稍平凡に近い様に思は
れる

想多き都の秋にたへやらで小雨ふる夜を歌に

まさしぬ

想は陳腐であるが調はよい

から止める(三)の如き「燐はの暗」と云ひながら朱欄だの木犀の花の白きなど云ひ出つるは頗る無理である他の歌にも隨分贅成出来ぬ詞遣ひかかる概して云へは君の歌は壯大の風はあるが未だ熟したものではない短歌は散文と違ふから餘程調に氣を付けて詞も無理な用ひ方は止めて欲しいと思ふ。

○ま、か、君

夢の上から見ても中々多い而も聰明星派の歌振り感心した作も少なくない中でも

(一) 夢多き身の安からぬ秋の夜や、京を北
一百里の我

(二) 秋寂し夜蜘蛛の糸にくゝられて我影壁に
日々廻り行く

(三) と云ひて面をむけし我やあらぬ萩の下露

(四) 月の夜毎唯にきけとや村下の水車へ若き
そとふれて見き

であるこの一句の爲めに全体の景が滅殺されてしまつた感がする又(二)の下句ばかりを讀んで見ると丸で明治の歌でない様な氣がすることはさうに少くはない。

さうにかして貰ひ度かうが
○水 衣 君

僅々五首ではあるが各首皆誦す可き價を持って居る

(二) 詩は獨りうれひの手綱君のせて若き駒や
る野のこもひかま

(二一) こと問はむうかれにあらす都鳥みし」と
「あつゝ、三

(三) やゝありて鷗きえたる波月夜君ゆきし日
なしと浦の小簾より

就中以上の三首の如き頗る宜しきを得たものと
こそかくはありしか

云ふ可きである纖麗にして而も巧に過ぎざる所
間々君の短歌に於て之れを見る所である(二)の
如き一幅の畫にしても趣が多い否矢張り歌とし

かくれ嵯峨野路
この歌とても濃艶な決して非難す可きものではない否調の圓滑に言廻しの面白い所は誦す可きであるが僕は寧君か餘りに巧を弄するの極を危ふものである。

概して云へは君の歌が前號の短歌欄中に於て最も秀てたものだと思ふ。

かくれ嶺峠路

さてしまつたからかも知れぬ然し措辭の工合は
巧みである。

被衣してまゝし秋の夜長曠笛による子を月の
くまなあ

て静かに誦して居る方が好いかも知れぬ(三)何所ともなしに餘韻がある僕は此の様な歌は好きである。

卷之三

上の二首の中(一)の下句「雅趣あり」は頗る拙な遣方である外に今少し雅趣ある詞がある可き筈
塩たくなり

(三) 浪枕夢より夢の寒しろに毎人の状況
む木立雅趣あり

君或は歌は自分の主張に依て作るので判らぬ人
には判らぬでよいと云ふかも知れぬが。

過きるので好まないのである否寧其の意の在る

などは良い歌たと思ふ(一)の如き多く云はすして境を表はす遊子の秋思云ひ得て佳(二)(三)亦各々言廻しかよい而も(四)の情楚にして餘情の盡きざるに到ては君の作中の白眉とすべからものであらふその他まだ一二首奇麗だと思たのも有るか僕は一体明星派の歌は餘り詞を奇矯に用ひ

舍守唄ひ來

雜報

以上は僕の愚見で敢て評と云ふ程の事ではない
か些か思ひ付ひたまゝ書いて見たのである。

其三

燕。雀。

非を非ざすれば讃るに近く是を是ざすれば
媚ぶるに似たり、妄言多罪、

斗牛君の歌

(燕)二十六首の中我意を得たるは「暮れてゆく」
「秋風の」「壯なりや」のみ前二首はさして傑作
となすに足らねど「壯なりや」は慥に悽壯の狀
を表す前後陳腐淺薄の歌に挾めらるゝより人
往々此歌をも空元氣の作とし捨つるは深く惜
む唯「電の戯」の一句のみにて太古荒城髪鬚と
畫出され詠史としても紀行としても遜色なし
慨して君の歌は着想も淺薄なれど修辭の不注
意は實に言語道斷全般の中概昔惡澁滯讀で其
主意を窺得べきは稀なり愛する斗牛よ必しも
多作に及ばず着想と修辭とに慎重せられよ、

よ「果敢なしそや」「さはれ見よ」等なり山出
しが語尾に感嘆詞を頻につくるは充分思想を
表はせぬが故といへば君の歌をもヨーヨーヤ
イヤーと賞められもせず「補陀落・絶えく
に」かかる處にこそれ好のやかよを用ひべけ
れ如何、慨して君の歌は鉄幹が虎をして董の
野邊にうならした亂暴時代の調なり想は古く
形は新しく然もその新形も數年前の流行たり
き、凡て物は極めて古くなれば骨董的にて妙
な味あれど本地新しくして燐りかけしは店
曝にも迷惑なりよほく爺のもうろくはいと
しきも若くして水つ鼻たらせるは疎しからず
や、

まか君の歌

(燕)咄(雀)は逃げたあさらば獨りしやべらん哉

僕は明星派を好みが此君は殊に晶子崇拜のた
方と見へ君の歌を讀むと丁度「亂れ髪」か「舞

(雀)「暮れてゆく」「再は逢はじ」よし「秋風の」「大
によし清怨なりかくて歌中の人に「君は今駒
哉されど「宴果て……朱欄に白う」の朱欄は汗
形あたり」の名吟あるなり君の詩趣美すべき
哉されど「宴果て……朱欄に白う」の朱欄は汗
水垂して膠づけせし如く「時雨降り」意氣な端
唄がなくべく「うらぶれし」は第五句でめちや
く「壯なりや」は(鷹)は大に賞めたが鉄幹が
和藤内の向を張り虎をふまへてにらみ出した
頃の調「そぞろ我が」の「星影一つ」はもう吉い
「夜を晝に」は晶子の「思なくて……下品の佛
の佛下品の佛」に似て然も「南無阿彌陀佛は「上品
佛」とするに若かず「うらぶれて」「補陀落」「秋
風の」此等は蓋し取材は淨瑠璃よりか、驚く
べきは感嘆詞の濫用にして「十年よ……あ、秋
よ」「秋の行方や」「時雨れてゆくよ」「ゆく君
よ」「壯なりや」「吁大なりや」美はしや「思へば戀

扇」を披げてる感あり從つて全般女性的精緻
に富む例は「若うして」「秋寂し」「茶煎る」
「さればとて」「幾度か」等の如しされど又君獨
有のチャームのあるは明なり僕は君の此才に
成れる戀の歌をきかまほし、僕の好は「小屏
風に」「秋寂し」胸は重し」「腹這ひて」「涙な
り」等にて猶秀咏あるも右のを勝れて巧妙と
す「秋寂し」の如きは着想に於ても言廻しに於
ても容易に得易からざる作なり蓋し「蘆笛」中
の白眉ならむ乎然し君の歌は強て華語を列ぬ
る弊あり故に往々きざいやみしつこひ等の修
飾語を蒙るるあり「若うして」は其例とす又
往々難解の句あるは(此作者にもわからぬな
るべし)君の才の餘れば平、

瀬平君の歌

(雀)「青葉ひたす・藻の花白う」は斗牛の「朱欄
に白う木扉」よりたのづからなり「山駕籠は」

も斗牛の「日は入りて野分に」より何となく箱根らし

る作ならずや。

「影もなき…月高梁には大に苦しんだるもの

なるべけれど未だ苦しみぬけず、「水細う」は四年前の「犀川の邊に立ちて」などと長々しくかきし焼直しなり古い「新聲」の臭氣あり、前

四首よしこの君の歌美しく優しくふくよかな

りきされどよき衣着せし紙雛の如し姿よけれ

(燕)然り讀むでわかり易きは君の歌なり誦して

ご未だ暖き血と肉はあらず、

(雀)歌は一讀意味がわかるより三誦意徹するを

唱ひ易きは君の歌なり

(雀)此君の歌は竹柏園流の女學生中學生には歡

迎さるべし凡俗なる想ひを口調で蔽ふは君の

特色なり、「星に誦す」は流石に老巧と感する

も他は大抵諸新聞で見たる想なり特に「水細

（雀）「詩は獨り」誰かの如くギスゴスせず輕し
「被衣して」第一句第二句をか調をもつて始ま
る故第四、第五句の子、くも極立ちきこのる
事爽にげに秋晴れし夜の月に似たりよし
「ことこほん」よき歌なるが「うかれにあらず」
を尙一考あらまほし、「やゝありて」の波月夜
は明星派の草月夜的なりといふ人あり如何、
「蝶を尋ね」に桃われ結へるなれば町家の娘か
若しくは雛妓なるものなるべしそれが「侍る」
言葉を使ふやわれしらず、此君の歌なれたる
調なり僕大に愛誦す、

「蝶をたづね」の第四句「十五が袖」は君にもふ
さはしからぬ浮きたる調ならずや、

其 四 斗 牛。 「さればとて抜け毛からまる櫛の歯のかけしを

ま、か、君 の 歌 「さればとて抜け毛からまる櫛の歯のかけしを

「さりごもの瘦男が露の清ければやせやせ咲け
る萩の一本」

よみ行くまゝに我も亦清き露に潤ふたもひ、情

韻限りなく、景また清麗、恐く君か歌中の天な

らん。

「思ひそぞろそと追ひ見れば誰か子一人秋の夜

姿いと寒げなり」

これ君が歌中の駄作、何の味もなし、歌よりも

寧、二十七字文程のものなり。

「秋寂し夜蜘蛛の絲にくられて我影壁に日々

われ箱根の景を愛す年として訪はざるはなし、
今此の歌を誦すに及んで、烟宿あたりの景眼さ

夜蜘蛛の糸を用ゐたるは氣の利きたるやうなれ

きにちらつくは、君が飾らずありのまゝを詠み

細り行く」

栗本瀬平君の歌

たるによるなるべし。清楚可掬、天首肯するや
否や。

「星に誦す哀詩の吟の音に通ふ葉づれやさしき

（も口惜しく思ふところなり。）

たるによるなるべし。清楚可掬、天首肯するや
を我に叫ばしむること決して妙くはない、返へす

森の調べよ」

歌ふ所常套を出でず、わけても下の句は此句を

其 五 水 衣 紫 雲。

損ふこと大なり、總じて君の歌には語の眞なる
ものは是あれど、情の切なるものは少し。

水衣君の歌

「蝶をたづねあぐみ侍ると桃われの十五が袖に
かくれ嵯峨の路」

「ことゝはもうかれに非す都鳥みしことなしと
浦の小簾より」

「ことなくゆかしいやうな氣もすれど一体がぼ
んやりしてゐて、さながら花のうつれる水を掬
んでかぐが如きにもひあり。一体君は詩歌の自
然の境を脱した處に多く想を走しらす、されば
ひねくり過ぎ、考へ過ぎて、却て、不可解の嘆

君の歌には一点の瑕瑾を見出すことが出来ない。神韻のある綺繡且清楚な歌である。確に崩

然として衆を抜いてある。

「蝶をたづねあぐみ侍ると桃われの十五が袖に
かくれ嵯峨野路」

なぞ歌調に於て立派に圓熟の域に達してゐるご
云ふより外に言葉はない。然し朦朧の詩趣をほ
のめかしたい爲めに奇を弄し過ぎる傾向が見え
る。則平凡から脱却して纖麗の妙を極めんとする
作者の考から自然と其の御化粧に念が入るの
であらう。

「ことゝはもうかれにあらず都鳥みしことなし

と浦の小簾より」

なぞよい證據で作者の苦心の痕が知れる。

「詩はひとりうれひの手綱きみのせて若き駒や
る野の思かな」

「若うして胸に幾重と結ぼる、帶もぞ彩を千草
好める」

「月の夜毎誰にきげとや村下の水車へ若き舍守
唄ひ來」

これ等は皆捨てがたい妙所があるがこの外のは
大概似たりよつたりで格段に佳調であると言ふ
ほどのものもない。眞率に熱誠に平板から超脱
してほしい。要するに君は情の人である温和な
歌人であるこの点に於ては校中君の右に出づる
ものはあるまい。

君の歌は燐然一異彩を放つてゐる構想新しく叙

斗牛君

情に堪能であるのが君の寶となつて景情自ら生
き雅致自ら湧くやうになる。調は充分圓轉の域
にあるものとは云はれぬ。

「秋寂し夜蜘蛛の糸にくられて我影壁に日々
細りゆく」

なぞこの例證である。

詞に注意をしてほしい。

「さはれ見よ幸あるものも幸なきも野末の草に

光なが星

これだけが先駆らしくツテ流暢、温健
々、三誦して贊かぬと思はれる。

要

の

१०८

朝行く

朝日

の調べよ

なんと温和な

いか！前者は寧ろ俳句的で十七詩から脱化したもの、着想の点に於てまさり後者は新體詩から源を發してゐるもの調に於てすぐれてゐる。こ
こか君の長所か。この特長は大田原清美君と大
に類似してゐる様に思はれる。

が煩したい。

卷之三

新年大茶話會記事

光明ある新天地は茲に開展せられぬ。燐爛たる
榮光めくり来て、運命の花華やかに乾坤歡樂
の影にみちぬ。

時や明治三十八年正月三十日。新春大茶話會を無聲堂に開く。

群鶴古城の暮に喚び、寒鳥荒壕の靄に羽ばたく頃、集合の鐘に伴られて定めの會場に入る。來賓席を見やれば、諸先生御座し、通學生、寮生、ひつひつ堂に溢る。よしや阿房宮の壯美なく帝國ホテルの華麗なしと云へど、心切なる會場係諸子の丹誠によりてなれる裝飾は、燦然として煌き渡り、各國々旗四條の幔幕、爲めに映えて一入の美しさ。正面には、「如水」の扁額懸り、

四柱の表には「一杯一杯重春風寒」一題の國語の
この幸に春立ちぬ」などの辭句活躍す。あゝ誰かこの裡にあるもの、陶然清崇の氣に酔ひ恍乎として桃源の園に遊ぶが如き美妙の感にうたれざるものあらんや、實に心ある人にみせたきものの様にこそ。亮々たる音樂終れば、寮委員總代として柳沼廣三君、壇上に現れ開會の辭を述ぶ。其の要に曰はく「本學年に於ける新年大茶話會は、例に變りて特色あるものなり。則、一

は今宵、此席に吾等の先輩舊寮生清水監藏君の來臨を忝うし和樂を俱に與にせらるゝこと。二は、征露第二年の曙光めでたくかゞやき渡り、滿州の主權我が手に入るの近きにあり。實にこれ國民として眞率に満腔の熱誠を以て祝意を表せざるべからざるときなることこれなり。然れば諸子與に樂しき海に棹して一夜の歡を盡せられよ」と明晰に述べ終つて降壇、變つて次に清

右は北辰會雑誌第三十九號歌壇を一寸のぞいて妄評を下した梗概である、評者は斯道の門外漢で第一詩歌の是非を云々する値のない輩であるがれせつかい好きな野治的根性がこのやうな亂的な飛入平を放てさせて次第である、から妄平

水監藏君登壇せられ餘ろに語りいで、曰はく
「私は通稱を猫ととつたる、もとこの寮にゐた
あらくれ男で御座ります」と滑稽なる奇言人の
喝采を呼び起し次いて帝國大學文科の新制度を
説明せられ終に「吾人は自恃の精神と鞏固たる
能力の自信とを以て學海に掉せ」との訓言をの
こして降壇せられぬ。其の一言一句吾人を裨益
せざるはなかりき。次に現はれ給ひしは温顔佛

陀の如き三竹先生なり愉快靈活の辯を振つて
一現時大に精神的修養を要する機なり。由つて
以て吾人は確乎金鐵の如き信念を悟得し、現今
渾殼せる志想界の潮流に立つて新古思想の融和
をはかれ」と論せられぬ。先生の辯や圓轉、說
や適切吾人は先生の高徳を稱して「山高水長是
先生の徳」と謂ふ。次には、小びとながらも熱
心なる且有名なる辯士現はれて得意の高論卓說
あり、終つて余興に移る。

妙なる音樂を耳にして甘露の茶菓に頬打ちする
ときしもあれや、急ち見る、正面の廣間に短袴
の偉大夫秋水を腰にしてあるを「踏破千山万岳
煙」と吟じ出づるや急焉空に劍花閃めいて紫電
の影飛び、一躍一轉伎神に入つて肉自ら動く、
懦夫爲めに立たん美姫爲めに泣かん。

次の舞は「蒼龍」。これ剛壯の極。舞ふ者のわざ
の力入れるに、見る者またつれられ腕坐ろに鳴
る思あり。衆、夢より醒めぬ間に幔帷の裡ハモ
ニカの妙音起る。石を裂く水の音か。松にこづ
たふ囁きか、將た天津乙女の手すさぶ琴の音か。
あらずこれ安藤榮吉君得意の「マーチ」の新曲！
余興第一席は「鴻門の會」と云ふ。白幕開けは項
羽軍門の場。一壯士現はれ劍を横へ盾を擁して
内に入らむとす。これ誰とかなす、樊噲其人な
り。交戦の士、阻めむとすれどもあたわず。迫
りくる衛士の奴原を撞き仆して亂入する状蠻に

にしてよく豪傑の風を寫せり。次は「鴻門の會」
にて。沛公、項王を上坐に項伯、亞父、張良の面
々威儀を正うし澄して御座る體、すべて宴會の
さまにて幕あく。面々の澄しきさまのをかしき
に、われしらず噴き出すもの多かりき。其の扮
裝のとりどり滑稽なるに念入りて、苦心の様ぞ
知られける、やかて、范增、佩ぶる所の玉玦らし
きものをあげて項羽に目すると數回、項羽澄し
て知らぬものゝ如し范增少しやけ腹を立て、席
を退く所に項莊てふ一武士君前に召されて壽を
なす。なし終つて立つて劍舞す。心、沛公を刺す
にありあゝ事や既に迫矣。これを見てとつたる
項伯また立つて舞ふ、一種奇てれつの口中音樂
につれて二士共にはねまわる莊、擊たんとすれ
ば伯、身を以て沛公を翼す、事や甚迫れり、時
しもあれ。贈は、衝入し來り帷帳を披いて場に
現れ、目を瞑らして項羽をにらむ。あゝ壯なり

やそのスタイル！怒髪天を指し、眦さけて、黒くく
まぞれる面魂底に光あり。項王劍を按して「客
は何するものぞ」張良すかさず「こは沛公の幕
參樊噲なるものに候」。壯士なり」とこれに斗酒
を與へ、生彘を賜る所よろしくありて後鬱士、
席をすゝめて項羽を罵倒す、意氣壯また猛と云
ひつ可し。かくする中に沛公、雲隠れと相成り
亞父、憤然沛公より贈り来て、玉斗を地に投げう
り。交戦の士、阻めむとすれどもあたわず。迫
りくる衛士の奴原を撞き仆して亂入する状蠻に
り。

次は「垓下の陣」。三軍散じ盡くして旌旗倒れ、
今や項羽身は重圍の裡に餘命をつなぐの悲境に
あり、あゝ英雄本、万人の敵を學ぶ剛強なれば
死し仁義なれば王たり。登る朝日の勢は南柯一

睡の夢なりき。今は野末の叢に露の身をなく秋
蠍のはかなき様當世の春の運命は夢幻泡影のそ
れならずや。孤燈悲風にまばたく影に虞美人の
舞ふ様にて幕あく。舞も終れば項公、悲歌慷慨
吟じ出づる、から歌は「力拔山兮氣蓋世時不利
兮離不逝、離不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」
ときこねぎり。ときに誰が子の笛か、悲壯の曲
をなす。虞突然自ら劍に伏して仆る項羽驚核い
かんともするを得ず。佳人を擁して泣く所にて
幕。あゝこれ悲哀の極!香魂夜劍光を遂うて飛
び、青血化して原上の草と爲りしどかや。この
劇を見るものアクタアーチのわざにうたれて暗涙
を浮べつやんやと喝采のこゑもあげぬ。

第二席は「一舉抱腹」とて寮委員の腕き、揃の茶
番なりこれは「骨皮」を少しく焼き直せしものに
て、其の出場する面々の中ことにすぐれてみえ
けるは、小坊主に扮したる白上ぬしなり。其の

第三席は「東洋の怪雲」とて戦争物なり。場に
登るものステッセル大將、同夫人、日本使節、
朝鮮人、日本軍人、露助等よく活躍して狀を抽
ひぬ。

寫せり。筋は、平凡なりしも面白可笑當日の呼
びものたるを失せざりき。

時はうつり行きぬ夜は更けぬ宮川生徒監の音頭
にて、天皇陛下万歳、四萬歳、時習寮万歳を
三唱し終つて一同寮歌を歌ひつゝ散會したり。
堂をいづれば永劫の星微笑みて古城の松に閃き、
くしき雲空に流れ、五位鷺の鳴く音夜の静寂を
破る。この世の春は淡けれど「平和の寮」は和樂
の影に充ちみつるなり、世はこゝを呼んでかり
の名を時習寮と云ひ、またの名を和樂殿と云ふ
となり。

(紫雲)

寄贈雑誌（北辰会宛）

躬行會叢誌

十九號ヨリ

躬

行會

信仰界

三卷十號ヨリ

信

仰界

尙志會雑誌

四卷三號ヨリ

尙

志會

九十九會々誌

六十二號ヨリ

九

九

九十九會々誌

六十五號ヨリ

九

九

九十九會々誌

千葉縣立成東中學校同會

千葉

千葉

九十九會々誌

第二高等學校同會

第二高

第二高

九十九會々誌

修養會雜誌

修養

修養

九十九會々誌

校友會雜誌

校友

校友

九十九會々誌

華陽會

華

華

九十九會々誌

嶽水會雜誌

嶽

嶽

九十九會々誌

桐陰會雜誌

桐

桐

九十九會々誌

校友會雜誌

校友

校友

九十九會々誌

坂東太郎

坂

坂

九十九會々誌

仁會雜誌

仁

仁

九十九會々誌

學友會雜誌

學

學

九十九會々誌

學友會雜誌

大坂府立北野中學校校友會
愛知縣立醫學專門學校同會
神宮皇學館同會
福岡縣立中學明善校同會
富山縣立魚津中學校同會
東京高等商業學校同會
東京府立第四中學校校友會
石川縣師範學校同會
喜崎縣立延岡中學校同會
岡山縣立津山中學校濟美會



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る

一長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
一雅志二二(雅志)へ、一

一新記上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし。

如何なる種類の投稿にても宜しされど、或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

次號投稿切

次號投稿切

明治三十八年四月十四日印刷

明治三十八年四月十七日發行

印 刷 者

編輯兼發行者

印
刷

發行所

石川縣金澤市早道町五十六番地
行 政 村 召 告

